
魔法少女リリカルなのは 夜天の弟

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 夜天の弟

【Nコード】

N4729Q

【作者名】

楚良

【あらすじ】

ある日姉と喧嘩して勢いで家出してしまった。

家出をして少しして思った。

何であんなことを言ってしまったのだろうと。

帰って謝ろうと思って座っていた体を起こそうとした時だった。

手に感触がありそれが何かと見てみると赤くきれいな宝石だった。

急に宝石は光出して俺は何処かに飛ばされた。

※メインはstrickersですがその前に中学時代の話があります。

もしかしたら中学時代が意外なほどに長くなる可能性があります。

プロローグ

少し前までずっと天涯孤独の身だと思っていた。

親は2人とも死んでしまった。

親の知り合いだと名乗る「ギル・グレアム」おじさん。

あの人がお金などいろいろなものを援助してくれた。

9歳の時に闇の書の守護騎士たちがうちの元へやってきた。

家族が出来て本当にうれしかった。

辛いことも悲しいこともあったけど今はとっても幸せや。

中学に入って2年になったころだった。

グレアムおじさんから突然手紙が届いて読んでみると、その内容は1つ年下の弟がいると言うことだ。

名前は友紀^{ゆき}。

女の子みたいな名前で、声とかも女の子っぽかったけどとっても元気な弟やった。

でもある日うちと友紀は喧嘩をしてしまった。

勢いで友紀は家を出て行ってしまった。

探しても探しても見つからない。

次の日になっても、一週間たっても、1ヶ月たっても友紀は帰ってこなかった。

うちは泣いた。

なんで喧嘩をしてしまったのだろう。

その時とっても後悔してたくさん泣いた。

それから5年。

うちは友紀を探しながら部隊を設立した。

機動六課。

友紀の事を探しているが手がかりすら見つからない。

今、友紀はどうしているのだろうか・・・。

プロローグ（後書き）

主人公の名前は「八神 友紀^{ゆき}」にしました。
元ネタは「これはゾンビですか？」の「吉田 友紀^{ゆき}（メール・シュ
トローム／トモノリ）」です。

友紀の中学校生活で出てくるキャラを募集しています。

こんなやつがクラスにいたら楽しそうだなとか、こういうやつはい
そうだなって思ったキャラを書き込んでください。

僕が「このキャラいいな！」って思ったキャラは出演させます（一
部変えるところもあるかもしれませんが）。

ギャグあり、シリアスありの小説です。

アイデアが思いついた方、感想がある方は遠慮なく書いてくださ
い。

あと誤字脱字とかも注意してほしいです。

第01話 出会い（前書き）

どうも楚良です。

最初っからですがキャラ紹介します。

八神 友紀^{ゆき}

あだ名…トモノリ

容姿…「これはゾンビですか？」に出てくる吉田 友紀と同じ顔。

最初は髪を束ねておらずストリートにしてある。

後にはやてに髪留めを貰いそれから髪を束ねるようになる。

性格もほとんどそのまんま。

特技…走る事、料理

趣味…走る事

レアスキル…???
（仮）

備考…はやての親が死んで少したった後にグレアムに海外へ連れて行かれる。

日本語はグレアムが教えこんだもの。

小学では特に問題もなく過ごしていた。

グレアムは中学に入るまで友紀に黙っていたのは

はやてが中学に入るのを待ち

友紀に小学を卒業させある程度知識を付けさせるため。
トモノリと言われることを嫌っている。

第01話 出会い

オレの名前は八神 友紀^{ゆき}。

一部を除けば普通の男の子さ。

俺が物心ついた時にはもう親父と母さんはいなかった。

ついでに言うとは今は海外に住んでいる。

もっと言ってしまうえば日本人で日本語は当たり前のようにペラペラだ。

親父の友人とか言うグレアムっておじさんがオレにお金などを援助してくれたおかげで小学校生活はなんなく過ごせた。

今年から中学に入るらしいんだけどいきなりグレアムおじさんから手紙が届いた。その内容は意外なものだったよ。

なにせオレに1つ上の姉がいるらしいんだ。

住所は日本の海鳴市って所らしい。

オレは編入生として向こうの中学に通うか通わないかを聞かれた。返事はもちろん通うにきまつてるぜ!!

せっかく家族がいるのに合わないのは失礼だ!!

これで、寂しい事を忘れられる・・・かも・・・。

ま、悲しいムードは放り投げておこう。

現在オレは日本の海鳴市に来ちゃってる。

服装は私服。

バッグの中に制服が入ってるけどね。

「あんましあっちと変わんねえな」

グレアムおじさんはもうオレの姉ちゃんに手紙を出してるみたいだ。
オレが家に行ったら快く迎え入れてくれるらしい。
ただし1日だけ自分でどうにかしろとの事だ。

そう言えば今日は金曜日だ。

今日を乗り切ればなんとかなるはずだ。

「とりあえず編入先の学校へ行くか」

実際今日は編入当日。

学校行かないと怒られるんだよな・・・。

「・・・あれ？」

最速で当然のごとく迷った。

今8時くらい。

編入当日に怒られるのやだな・・・。
やばい。なんか涙出てきた・・・。

「君、どないしたん？」

「へ？」

突然声をかけられた。

振り向いてみるとそこにはとってもきれいな女の人がいた。

「どうしたん？お姉ちゃんにいうてみ？」

「えっと・・・み、道に迷って・・・」

「そか。んゝ時間はまだあるな。何処に行きたいん？」

そう言われるとすぐさま何処に行きたいかを言おうとした。
あれ？中学の名前って何だっけ？

そうだ！編入するときに貰ったあの紙見せればいいのか！

「えゝつと、あ！あつた！ここ！！」

「ここってうちの中学やん。どうして？」

「今日行かないといけないから・・・」

「そうなんか。じゃ、一緒にいこか」

「は、はい！！」

ホントこの人優しいな。

ってな訳で着いたよ私立聖祥大附属中学校。

なんか覚えにくい中学の名前だな。

あの人とは途中で分かれた。

また会えるといいな。

おっと編入してきたって校長だっけか？に言わなきゃな。

side out

はやてside

今日はなんか忙しい日になりそうやな。
朝には迷子の子をみつけちゃったりしたし。
明日には弟が来るらしいし。

「はやおはよう」

「はやてちゃんおはよう」

「あ、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃんにすずかちゃん、おはようさん」

「ねえはやてちゃん知ってる？ 今日1年生の方に編入生が来たらしいよ。なんでもとってもかわいい子だって」

編入生？

まさか朝のあの子かな？

行かないじゃないって言うておったし。

「行ってみようよ」

「そやな。なんか気になるしな」

行って見ればわかるやろ。

うちら5人は1年生の教室に向かった。

はやてside out

友紀side

「えゝ前から皆さんに話していたと思いますが今日から海外の留学生の子が来ます」

校長に挨拶に行った後早速教室の前にいるオレ。
て言うか先生前から言っておくなよ！

「先生！男の子ですか？女の子ですか？」

「それは言えないけどとってもかわいい子よ」

『おおおおお！！！』

なんで先生そんなこと言うの！

そんなこと言ったら余計入りずらくなるじゃん！！

「と言うことで八神さん、入ってください」

ああ！もういいや！

どうにでもなれ！！

戸をあけて普通に入る。

なんか普通に緊張するな、もう！

いつも通りだ、いつも通り。

「八神 友紀だ。よろしく」

『おおおおお！！！』

『か、かわいい！！』

『でもなんで男の制服着てるんだ？』

『さあ？』

今かわいいって言ったヤツ後でぶっ飛ばす。
ついでにオレは男だ！！

「八神さんは窓際の一番後ろの席に座ってくださいね」

「あ、はい」

ホームルームが終わりオレは文字通り質問攻めにあっていた。
と言うか人数多すぎなんだよ！！
数人程度で済ませろよ！！

「向こうの学校ってどんな感じ？」

「趣味とかは？」

「どうして男の制服着てるの？」

「君は女の子なの？」

最後の2つの質問は聞き捨てならねえな。
言ったヤツホントに後でぶっ飛ばしてやろうか！？

「あ、八神先輩に高町先輩たちだ！！」

「ゴメンな。ちょっとみるだけやから通してな」

『どうぞお通りください!!!』

人ごみの中を掻き分けて5人の美少女が入ってくる。
今声そろえたヤツらファンクラブか何かか？
息ぴったりすぎだろ。

「結構可愛いね」

「うん。そうだね」

「あ！君！！」

その5人の中に朝に合ったあの女の人がいた。
同じ中学って言ってたけど本当に会えたなんて。

「朝に助けてくれた人！！」

なんやかんやでオレの日本での生活が始まった。

第02話 運動大好き勉強苦手（前書き）

前回のキャラ紹介に追加がありました。

趣味.. 走る事、運動、料理

特技.. 走る事、運動、料理

得意教科.. 英語

（アリサを圧倒するほど得意）

苦手教科.. 数学、理科、社会

身長.. 140? ちょい

性格.. いつも元気で明るい性格。

ときどき? アホの子。

運動が大好き。

アウトドア少年。

備考.. いつも外で運動して遊んでいるのに肌が透き通るように白い。

姉のはやてが大好きで大切だと思っている。

勉強が苦手でもはやて達に教えてもらってる。

運動神経がぴか一で超人的。

特にすごいのが脚力。

走る事が大得意で大好きなのはこのため。

ジャンプ力もすごい。

球技もある程度できる。

やっぱりトモノリと言われるのを嫌っていて言われると
すぐさま「トモノリじゃねえ友紀だ!!」と言いつ返す。

はやてと同じレアスキル持ち。（内容は考え中）

第02話 運動大好き勉強苦手

「まさか編入生が君だなんてビックリやな」

今オレは教室の外。

眼の前にはこの学校の美少女と名高い人たち5人。
その中の1人。

八神先輩と呼ばれていた朝オレを助けてくれた人。

ん？八神先輩？

どうしてオレと同じ名字？

「まだ名前聞いてなかったな。名前教えてくれへん？」

「へ？あゝえっと、八神 友紀ゆきです」

「うちははやてや。よろしゅうな」

そう言えばオレの姉ちゃんって1つ上だよな。

だったらこの人がオレの姉ちゃん？

わかんないな。

聞くのもなんか失礼だし。

「あれ？今、八神って・・・」

「偶然同じ名字なのかな？」

「んゝ、友紀」

「は、はい」

いきなり呼ばれて返事をした。
何聞かれんのかな？

「明日、家族の所へ行くんやろ？」

「え！？なんで知ってるの！？」

「ふふ。実はうちの家に明日弟が来るらしいんや」

「その弟って・・・」

「たぶん友紀の事やな」

その場に居る全員が硬直した。
今なんて言った？

明日弟が来る？

それがたぶんオレ？って事は・・・。

『ええええええええええ！！！！』

「はやてちゃん弟いたの！？」

「つい先日知ったことやけどな。言っただけだった？」

「聞いてないわよ！」

オレはさっきからビクビクしすぎて口をパクパクさせている。
って事はあれか？

はやてさんはオレの姉ちゃんで、オレははやてさんの弟？

「だ、大丈夫？」

「はっ！！」

後ろ優しく肩をたたかれ我に帰る。
誰だかわからないけどありがとう。

「ありがとう。えっと・・・」

「私、隣の席の綾瀬 芽衣^{めい}。よろしく」

「サンキュー綾瀬。おかげで我に帰れたよ」

「そろそろ時間やな。友紀、またあとでな」

「え、あ、はい」

姉ちゃん？ 達は自分たちの教室に戻って行った。
騒ぎはある程度収まりオレも教室の中へ戻った。

く1時間目く

現在は1時間目。

1時間目は数学らしい。

それと今日は4時間で授業が終わりのようだ。
ついでに言うところの学校は弁当持参だから助かったと言っておこう。

「ではこの問題を、えゝ八神、答えは？」

問題の内容は $-3x + 9 \parallel 4 - 2x$
えゝっとどういう意味だこれ？

「 $x \parallel 5$ だよ」

隣の綾瀬が小声で答えを教えてくれた。
さっきから助かりまくりだな。

「えっと・・・ $x \parallel$ およそ5です」

その言葉を言った瞬間周りが凍った。
あれ？変なこと言った？

一部男子は大爆笑してるけど。

「俺の数学の授業で”およそ”と言う言葉を付けたヤツはお前が初めてだ、八神」

先生はその言葉を言った後頭を押さえる。
本当にオレは何をミスったのだろう。

ゝ休み時間ゝ

「はゝ、疲れた」

机の上にある教科書とノートをしまい一息つく。
たく、本当に何であんなことになったのやら・・・。

「さあ、さっきの続きだ！」

クラスのメンバーがほとんど寄ってくる。
さっきの続きⅡ質問攻め。
休み時間はつぶされました。

Ⅱ2時間目Ⅱ

2時間目は国語。

うん。国語だったら大丈夫だな。

へまはしないだろう。

というかさっきのあれで疲れが・・・。

よし、先生は見えていないな。

寝よう・・・。

水をぶっかけられました。(教室の外で)

Ⅱ跳んで4時間目Ⅱ

「これで今日は終わりかⅡ」

「次は体育だつてよ」

こいつは休み時間に手助けしてくれたヤツ。

名前は「前原 鍵」

今の所良く判らんヤツだが助けてくれたことには感謝しよう。

「マジか!?! 内容は!?!」

「バスケだよ」

「おお！楽しみだ！！」

「やる気あんなく。ま、別にいいか」

場所は移って体育館。

チームのメンバーは男子4人と女子2人。

混合のチームを作れと言われてオレと前原、綾瀬を入れたチームだ。他のメンバーは前原が勝手に集めた。

綾瀬は他に行くところがなさそうだから俺が誘った。

「それではAチーム対Dチームの試合開始」

今回最後の試合。

さっきまで違うチームがやってたりオレらのチームが交代交代でやってた。

「よっしゃ！1点！」

早速入れられたな。

逆転のし甲斐があるじゃねえか。

時間はギリギリになった時だった。

綾瀬の方にボールが転がって行って拾った。

周りには男子。

困ってるみてえだな。

次はオレが助ける？番だ。

「綾瀬！パス！パス！」

「えい！！」

ボールを上大きく投げた綾瀬。
それを見ると運動が苦手なのだろう。

「おっと！ナイスパス！」

ジャンプしてボールをキャッチ。
そのままドリブルしてゴール前まで直行だ。

「させるか！」

眼の前に1人ディフェンスに入るがそれを抜いてゴール前で大きく
ジャンプする。

何をするかって？

ダンクだよ！！

身長が小さくてもジャンプ力はあるんだ！

ゴールにボールを叩きこんだと同時に笛が鳴る。
終わりの合図だろう。

そしてオレの周りに男子が集まる。

「ぜひ我がバスケ部へ入ってください！！」

どうやら部活への勧誘だったようだ。

こうして学校初日は終わった。

ちなみに部活への勧誘はバツサリと断った。
運動好きだけどバスケ部とかに入ったらそれしかできなくなるから
な。

そしてこの日からオレのあだ名が「トモノリ」となった。
理由は女っぽい名前と顔してゐるくせに男顔負けで運動してるからだ
そうだ。

ついでに友紀の読みを変えたらそうなったからだそうだ。

第02話 運動大好き勉強苦手（後書き）

学校生活が始まりました。

と言うわけで学校生活でこんなキャラいたら面白いなと思った方は遠慮せず書き込んでください。

面白ければアイディは通ります。

抽選でそのキャラを登場させたいと思っているので書き込みお願いします。

第03話 八神家

4時間目の体育が終わり、さらにはホームルームも終わった。
この後どうすりゃいいかな。

「おいトモノリ。八神先輩来てるぞ」

「トモノリじゃねえ！友紀だ！」

「いや、反応してんじゃん」

「認めたくないからこう言ってるんだよ！」

前原はもう放っておこう。

ちょっとめんどくなってきた。

「こっちの学校の感想はどうや？」トモノリ」？」

「感想はあっちとほとんど変わらないかな。それとオレはトモノリ
じゃなくて友紀！」

「ごめんごめん。冗談やて。さ、行こか」

なんでさっき付いたあだ名が2年生にまで行ってるんだ？

一体だれが流し——前原お前か！！

後ろ向いたときにちゃっかりグットサインしてるよ！

誰かあいつの親指折ってあげて！

やっぱり前原を放っておいて学校を後にした。

本当に今日が4時間で助かった。
もし弁当が必要になってたら大変なことになってからな。

「あ、もしもしシグナム？うん、今から帰る。それで明日来るウチの弟の事なんやけどな？そや、今から一緒に帰るからみんなに言っ
といてな。うん、それじゃ」

携帯で家に連絡を入れていた姉ちゃん。

シグナムって家族の人かな？
会うのが楽しみだぜ。

「そういえばどうして『トモノリ』なんてあだ名がついたん？」

「ん？あゝ、オレの名前って女っぽいじゃん？」

「そやな」

「で、女っぽい名前と顔してるくせに男顔負けで運動してるからそんなあだ名がついた。後名前の読み方を変えただけ」

「なんや微妙な理由やな」

「だからオレはトモノリの名前で呼ばれるのがやなんだ」

編入初日であだ名つけられるなんてな。

しかも名前の読み方を変えただけって。

いつか絶対に『トモノリ』の名を消し去ってやるぜ。

「さ、着いたで」

そんなことを考えていると家に着いた。
何人家族かはわからないけど大きい方だ。

「あ、姉ちゃん・・・」

「どないした？」

「オレ、この場合『ただいま』なのか『お邪魔します』なのか良く
わかんなくて」

「・・・ただいまでええんとちゃう？だって今日から一緒に住むん
やし、それに家族なんやからお邪魔しますは変やろ」

「そ、そうだよね。ごめん変なこと聞いちゃって」

家の前で変なことを聞いてしまった。
なんかおかしなものだな。
すこしだけそう思っていた。

「ただいま」

「おかえりはやてちゃん」

「おかえりなさいませ」

戸をあけるとそこにはポニーテールをした女性とショート的女性が
いた。

たぶん家族の人だろう。

「後ろの子は・・・」

「ほら友紀、始めが肝心やで」

「えっと、八神 友紀です」

「主はやて、確か来るのは弟では？」

なんだろう。

いきなりこんなことを言われたせいかわ胸に何かが突き刺さるように痛い。

ぶっちゃけ悲しいよ。

初対面でも女に間違われるなんて・・・。

「あはは、やっぱ言われてもうたか」

「言われてしまったとは？」

「こう見えても友紀は男の子なんよ」

「「!？」」

「すまない」

「私もてっきり新しいお友達かと」

「いいですよ。別に気にしてませんし・・・」

実際は結構傷ついてるんだぜ？

でもそんなこと言ったら逆に悪い悪くしちまうだろう？
だから言わないのが正解なんだ。

「あ、はやてお帰りってこいつ誰？」

もう1人奥の方からやってくる。
オレと同じぐらいの背だろうか。

「あ、明日来るって言ってた弟か？だったら名前教えろよな」

「えっと友紀」

「そっか。じゃ、おかえり友紀」

「あ、た、ただいま・・・」

意外な接し方。

さっきの2人とは違いオレを女と間違えない。
さらには優しく「おかえり」と言ってくれた。
こんなことを言ってくれたのは本当に久しぶりだ。

「とりあえず中に入ろか。友紀にみんなの事紹介したいし」

「うん。わかった」

なんだか少しだけいたたまれない空気になりつつも家に入って行った。

この後オレの自己紹介。
家族の紹介をしていた。

ポニーテールの人がシグナム。
わかりやすく言うが一番上の姉って感じかな。

これからはシグ姉と呼ばせてもらうことにした。

ショートの人がシャマル。

こっちは優しいお姉さんかな。

シャマル姉さんと呼ぼう。

で、赤い髪の子がヴィータ。

素直な時もあるじゃない時もあるらしい。

でもこっちは優しいお姉さんかな。

ヴィー姉と呼ぶことにした。

最後に青い犬なのか狼なのか良く判らないのがザファイラ。

ペットっていいよな！

あだ名はザッファイ！

「友紀の部屋どうしようか？」

「空いてる部屋ねえしな」

「ないんだったら適当なところで寝るよ。気にしないしオレ」

「ダメや！適当なところで寝たら風邪引いてまう！！」

「いや、でも——」

こんな女性率の高すぎる家で同室なのは男として耐えられない。
というか同室だけは勘弁してほしい。

性的に、思春期だから耐えられない！

これ本当だぜ！？

「シグナム達の部屋も空いとらんし・・・ウチの部屋で――」
「それはか――」――反論は聞かんで？」

「はい・・・」

なんかあの笑顔が怖い。

それよりももうオレの人生は社会的に終わってしまうかもしれない。
たぶんオレが耐えきれずにな。

結局オレは姉ちゃんと同じ部屋で寝ることになった。
ホントもう勘弁してほしいよ・・・。

こうなってしまったものはしょうがない。

気を強く持つんだ。

耐えきればいつか・・・。

この後の夕食。

「はやての料理はギガうまだからな」

「姉ちゃんの料理ってそんなに美味しいの？」

「みんな美味しいって言うってくれるって思うとつい力入ってなく。
気がつくとも美味しい料理が出来てるんよ」

「すっげー！めっちゃ楽しみだー！」

「今日は友紀が来たから鉄板焼きか何かしようかな」

『おおー！！』

「私も手伝いますね」

「シャル、お前は手を出すな」

この言葉の意味がなんだかよく判らなかった。
手を出すなってどういう意味？

「シャルは料理が苦手なんだ」

「そ、そうなんだ……。あ、姉ちゃん手伝うよ」

台所にはオレと姉ちゃんが立っている。
無論シャル姉さんは立ち入り禁止だ。

「今日は鉄板焼きとお好み焼きにでもしようかな」

「あ、お好み焼きだったら任せてよ。それだけは自信あるんだ！」

「なら任せてええか？」

「おう！」

向こうで日本食を食う事は多かったな。

困った時はネット使って調べて作って食べたな。

お好み焼きは何回も作って味には自信がついたし頑張るぞお！！

（数十分後）

「ヴィー姉！それオレが焼いてた肉！」

「うっせ！こういう時は早いもん勝ちだ！」

食卓はある意味戦場だった。

ヴィー姉は見境なく肉を取りに行きシグ姉とオレは肉を死守する。たまにオレも肉を取りに行くがほとんど失敗している。というかヴィー姉よく食うな。

（これまた数分後）

こんどはお好み焼きだ。

さっきみたいな戦場化はしないだろう。

「もうそろそろいいかな。ひっくり返すからどいて、危ないよ」

手首のスナップを効かせクルツと裏返す。

ひっくり返すとお好み焼きはきれいなキツネ色をしていた。

我ながらいいタイミングだ。

食べやすいサイズに切り分けて行く。

食べたい分だけとってくれればいいし。

（食事終了）

「ふう、美味かった」

「友紀の作ったお好み焼きもギガウまだったな」

「あはは、ありがとう」

今は食事が終わってかたづけをしている。
オレは食器を洗っている。

「鉄板焼きの量が少なかったとはいえヴィー姉結構食べたよね」

そう、ヴィー姉は一番食べていた。

鉄板焼きを少し多めに食べお好み焼きも多めに食べていた。
あんな小さな体の何処に行くのだろう。

「さ、ヴィータちゃんもシグナムもお風呂はいっちゃいなさいね」

「ほーい」

「わかった。ではお先に失礼させていただきます」

「うん。ウチは後からでええから気にせずゆっくりな」

〓十数分後〓

「はやて、入っていいよ」

「はーい。友紀、先に入ってええよ」

「え？ いや、最後でいいよ。だから先に姉ちゃんが入りなよ」

家に来た初日に姉より先に風呂に入るのはあれだろう。
こういう時は最後に入るのが妥当と言ったところかな。

「ええんか？ でもな」

なんか迷ってるみたいだ。
何を迷っているのかはよく判らないや。

「んゝ、そうや！友紀！一緒に入るで！」

まさかの爆弾発言だった。

いや、何でそんな結論に！？

「え！？ちょ、姉ちゃん！？」

「さ、行くで！」

なすがなままに引きずられる。

ダメだ。精神面が耐えきれず死んだな。

どうにかして斬り抜ける方法はないのか。

「あ！ちょ、姉ちゃん！そこはダメだって！あ、ダー——」

※この後オレがどうなったのかは読者の皆様でご想像にお任せします。

第03話 八神家（後書き）

まさかのはやてのブラコンの一部が見えた初日w

設定的にはやては手紙を貰った時すでに弟をめい一杯可愛がろうと決意していたようです。

そのうち誰が見ていようと構わずにブラコンの力を発揮するかも！？

現在も友紀のクラスメイトを募集中！

思いついた方は感想覧、もしくはメッセー지를下さい。

面白いキャラであれば採用します！！

第04話 剣道

今日は少し懐かしい夢を見た。

小学校低学年だったかな。

昔オレは1年間だけ動物と一緒に暮らしていたんだ。

飼っていたと言うより引き取っていたかな。

その動物は狐。

ちょっと珍しいかもしれないけど気にしない。

名前は『タマモ』

なんでこの名前にしたかは覚えてないや。

別れるまでは毎日一緒に寝るときだって一緒だった。

いっつも肩とか頭の上に乗っていた。

肩に乗った時なんかは顔をこすりつけてきたりもしてきた。

毎日が楽しくてしょうがなかった。

で、ある日別れの時が来たんだ。

もともと野生の狐でふらふらだった所をオレが助けて引き取っただけだった。

ずっと一緒に居たかった。

でも1人暮らしで動物を飼って行くのは無理だったし、野生のタマモも群れがあるはずだ。

だから別れるしかなかった。

別れの時はたくさん泣いた。

もう一生分の涙って言っていぐらいの涙の量を流した。

悲しかった。

だから別れ際にこう言った。

「いつか絶対に一緒に暮らそうな!!」って。
だからいつか戻ってタマモを探して、覚えてたら一緒に暮らそうと思ってる。

この夢を見るといつも涙が出る。

寝ている時なのに、いつも枕を涙で寝らしてしまう。

おいてきてしまったことを後悔しているのかもわからない。
でもこれだけは言える。

オレは早くタマモに会いたいんだ。

「・・・あ」

目が覚めた。

ちよつとだけぼやけた目をこすり視界を取り戻す。

そう言えば昨日の風呂からの記憶がぼやけてるな。

思いたせないこともないけどオレが大変なことになるからやめておこう。

しっかり見えるようになると目の前には姉ちゃんがいた。

とってもいい寝顔だよ。

と言うかこれ以上この体制でいたら違う意味で死に兼ねないので体を起こす。

ベッドから降りて着替えて1階に降りる。

「あ、シグ姉」

「おはよう。よく眠れたか？」

「うん。シグ姉ってこんなに朝早いのか？」

今は朝の6時ちよつと前だ。

オレも毎朝こんな時間帯だけどシグ姉もそうなのかな？

「ああ。起きて何もすることは無いのだが目が覚めてしまうのだ」

「そっか。オレもなんだ」

「何もすることが無いのならば少し付き合え」

「いいけど、何するの？」

「これだ」

そう言って取り出したのが・・・木刀？
一体何をするのやら。

「これでも一応近くの道場で師範代をやっているな。剣道と剣術を
教えている。いつも起きたらやるのが日課だな」

素振りをしながら言うてくる。

素人のオレが見てもすの素振りは『すごい』の一言だ。

「・・・」

「はっ！・・・ふっ、やってみるか？」

「いいの？」

「それでも教えてる身だ。それに気になってしょうがないんじゃないかな
いか？」

「ははは、ばれた？」

「見ていてわかる。体がうずうずして止まらないと言ったところか」

「さっすがシグ姉。2日目なのにバレバレだ」

てな訳でオレもシグ姉に木刀を借りて素振りをすることに。
意外に難しいんだな。

振り方とか、腰の入れ方とかいろいろ言われた。

本人いわく「修行すれば確実に強くなりそうだな」らしい。

オレは運動得意だけど自信ないな。

とりあえず毎朝続けるけどさ。

「おはようシグナム、友紀」

「おはようございます」

「おはよう姉ちゃん」

素振りを続けること1時間ちよい。

時間は7時を回っていた。

気付かなかった、そんなにやってたなんて。

「今朝はこのくらいにしておくか」

「ん、了解」

朝ごはんを食べながら今日何をするかを考える。

それにしてもやっぱりうまい。

これを毎日食べれるなんて、幸せだな。

「今日はどうしようかな」

「海鳴でも案内しよか？」

「実は昨日早く来すぎてたいていの場所は回っちゃったんだ。だから気持ちだけ貰っておくよ」

「そうなんか？ならどないしよか」

「ならさっきの続きをするか。お前はまだまだ伸びそうだ」

「んゝ。何もすることないし別にいいかな」

ゝ数時間後ゝ

現在オレはある意味命の危険に瀕しています。

たぶん察しがいい人ならわかると思うけど一応言っておこう。

道場でシグ姉との試合だ。

無駄に気合を入れて集中してやってたらいつの間にかこんなことに・
・・。

「さあ、準備はいいか？」

「い、一応」

「では、行くぞ！」

「うおっ！」

突然の試合開始。

開始するやいなやすぐさま一撃を入れてくる。
て言うか一撃が重すぎるよ・・・。

「はっ！」

「甘い！」

こっちもひるまず一撃入れるが防がれる。
まさか本気じゃあるまいな。

「そこ！」

パン！！

少し高めの音が鳴り響く。

重すぎる一撃のおかげでオレは意識を手放した。

（数十分後）

気を失っているにもかかわらず夢を見るオレ。

そこには狐の——タマモ？

（マスター、早く起きないとお二人が心配していますよ？）

頭に直接語りかけてくる感じだ。

マスター？

誰のことを言ってるの？

オレの事？

それにタマモって喋れたの？

こんな疑問を残したまま目を覚ました。
本当になんだったのだろうか。

「友紀、大丈夫？」

「・・・あれ？タマモ？」

「タマモって誰や？」

「あ、姉ちゃん」

目の前には朝と同様姉ちゃんがいた。

「なあタマモって誰や？」

「え！？いや、人じゃないけど・・・」

「人じゃないって事は・・・」

「動物だよ。狐だけどね」

「今はどこにいるん？」

「外国の森の中だと思う。いつかあっちに戻って一緒に暮らそうって約束したんだ」

「そか。それともう大丈夫なんか？」

「うん。もう平気」

「そりゃよかった。シグナムも、少しは手加減せんと」

「すみません。つい熱が入ってしまっ」

なんだかんだで一日が終わった。

それにしてもあの夢の中のタマモはなんだったんだろう。
気になるけどどうすることもできないや。

※今夜もある意味の地獄を見ました・・・。

第04話 剣道（後書き）

楚良

「さあ、みなさんお久しぶり！作者の楚良ソラです！」

友紀ゆき

「主人公の友紀だ！」

楚良

「アイディアをくれる方は数人だけだけどありがとうございます！」

友紀

「これからも思いついたやつはどんどん書いてくれよな！」

楚良

「さあ、トモノリよ。ここでこんな会話をしていると言う事はどういう事かわかっているね？」

友紀

「トモノリじゃねえ友紀だって言ってるだろ！なんで作者まで！」

楚良

「その前に質問に答えてくれる！？」

友紀

「えーっとなんだっけ？コーヒーのエメマンと微糖の違いだっけ？」

楚良

「ちげえよ！！なんでそんな些細なことを聞かなならんのだ！！俺が聞いたのはどうしてここで会話をしてるかだよ！」

友紀

「えーっとかキャラ紹介的なもの？」

楚良

「ま、まさかトモノリがまともなことを言うなんて・・・」

友紀

「だからトモノリ言うな！それとまともって何だ！いつもオレがバカみたいな言い方じゃねえか！」

楚良

「え？違うの？」

友紀

「違うわ！」

楚良

「というかこんなの続けてたら一生設定発表までたどり着けねえよ！
！と言うわけで早速設定のしょくかい」

友紀

「おい！無視すんなよ！」

楚良

「黙らっしゃい！」

魔力光…黒（初代リインフォースと同じ色）

魔力ランク…S－

魔導師ランク…空中C 陸戦B（どちらも現在の状態。後々変化します）

術式…古代ベルカ式

レアスキル…炎の印

ファイアエンブレム

全般的に炎を操るレアスキル。

炎の強化、弱化共に操作可能。（他人のも可）

変換資質で炎を持っているため応用性がある。

自分の魔力を炎に変換させ硬化、強化などをして

魔力刀を作り出す『投炎』を自分で編み出した。

作れる武器は長剣と短剣のみ。

構成を間違えると石にぶつただけで砕ける。
数種類の炎を同時に扱えるため
炎を使う者にとっては最強のレアスキル。

デバイス

メテオ・オリジン

通称メテオ

機動状態は「Fate／EXTRA」に出てくるセイバーの「隕鉄の韁」と同じ。

待機状態は真紅の四角い宝石。

性格は至って普通だが元気すぎるため友紀と気が合う。

・灼熱神書（管理人格タマモ／ニゾンデバイス）

友紀が物心着いたときからあった古代ベルカの魔導書。

作った人間は不明だがなぜか狐をこよなく愛している（笑）。

主の条件が厳しいためマスターになった数はそんなにいない。

（条件は炎に関するレアスキル、炎熱変化持ち。自分と波長が合う人間。主の元まではランダムに転移される。場合によっては自分から動くパターンもあり）

管理人格は友紀が幼少のころに会ったタマモその人（狐）。

もともと名前がないため主に会うたびに名前を貰っている。

容姿は青いバリアジャケットに狐耳・尻尾というエキゾチックな容姿。

（「Fate／EXTRA」のキャス狐と同じ姿）

基本動物の姿でいることが多い。

幼少のころに会った理由は自分の存在（魔導書）に気付いてほしかったから。

残念ながら気付いてはもらえなかったが後に自分から声をかける。
別れ際に森へ入った後に魔導書に戻った。
友紀と同じように炎を操る能力がある。

【魔法】

・投炎

一番良く使う魔法。掛け声は「フレイム・オン」。
作れる武器は色は完全な紅の「隕鉄の韃」と「干将・莫耶」
「干将・莫耶」の場合は鶴翼三連かくろくさんれんが使える。
「隕鉄の韃」なら本体と連結させ「アローフォーム」にすることが出来る。

これが使えるのを知った日から毎朝作る練習をしている。
やる理由は「非常時用」でどうにかできる時は使わない。

・熾烈極めし七つの炎 フレイム アイアス

わかりやすく言うローアイアス。
烈火れつ、業火ごう、獄炎ごくえん、黒炎こくえん、蒼炎そうえん、緑炎りょくえん、紫炎しえん
の七つの炎で形成される投擲、砲撃、射撃に対して絶対的な防御力を誇る。

強度はローアイアスと同じぐらい。

・フレイムロード

文字通り炎の道。
ウイングロードと違い後ろの方は進めば進むほど途切れる。

立ち止まればその場で足場となってくれる。
これを使うことにより空中戦もできるようになる。
小学生のころ遅刻しそうな時によく使ったそうです（笑）。

・烈火大斬刀

紫電一閃のように刃に魔力をまとわせて斬りつける魔法。
主に斬撃を飛ばす魔法。

・陽炎影

わかりやすく言う幻術。
陽炎で作った幻影で相手を惑わす。

・他考え中

楚良

「こんな感じだ」

友紀

「フレイムロードは本当によく使ったなw。投炎は本当にやばい時だけだな」

楚良

「とりあえずこれからも友紀のクラスメイトを募集しています」

友紀

「いたら楽しそう、こんなやつはいそうだな、こんなやつがいれば面白くなりそうなんてキャラが思いついたやつは遠慮せずにどんどん書いてくれよな！」

楚良

「とりあえず今回はここまで！ではまた次回！」

楚良&友紀

「「まったね（な）」」

楚良

「最後まで合わせろよ！」

友紀

「次回からな！」

楚良

「あるか不明なんだからとりあえず合わせとけよ！」

友紀

「じゃ、もっかいやるか？」

楚良

「そうだな。では改めて」

楚良&友紀

「「まったね」」

第05話 英語だけ天才的（前書き）

今回はキャラのアイディアをくれた梨乃さんの「桐生 霊奈」を入れた回です。

アイディアをくれる人っているのは本当にいいですね。
ありがたく使わせてもらいます。

第05話 英語だけ天才的

日曜日と同じようにある意味の地獄を見てから月曜日。本当に耐えられるのが不安になってきた今日この頃。

毎朝早起きしては『投炎』の練習や、木刀での素振り。

『投炎』は毎日やらないと構成を間違えそうになるし。

素振りは、まあ、なんとなくかな。

「友紀、そろそろ行かんと遅刻するで」

「ああ、ごめん。ありがと」

弁当を受け取りバッグの中に入れる。

バッグの中身は教科書、ノート、筆記用具に加えて、ある本。

この本はオレが物心ついたときからあって、なんだか肌身離さず持っていないといけないと感じたからいつも持ち歩いてんだ。

それとこの本の事はまだ姉ちゃんたちにも言っていない。

自分に何か力がある。

でもそれは誰にも言わない。

と言うか言えない。

だってそんなこと言ったらみんな怖がって近付いてこなくなる。

それにオレってこう見えても寂しがり屋だからさ。

ま、なんやかんやでオレは隠し事が多いのだ。

いつしかばれるってわかってるけどその時は自分からは話す気だしさ。

「じゃ、うちはあっちゃから気いつけてな」

「学校なんだからそんなことないと思うよ」

「はいはい、とりあえず勉強頑張ってな」

「うん」

姉ちゃんと別れて自分の教室へ。
あれはあれで優しい姉だ。。

「よう八神」

「なんだ前原か・・・」

「なんだとはなんだよ。金曜助けてやっтарろ」

「それとこれとは話が別だ」

編入初日の金曜日。

質問攻めにあっていたオレを手助けしてくれたのがこいつ、
「前原 鍵」だ。

学校2日目だから未だにどういうやつかはわからない。
ただわかる事はうざい時が多いヤツだ。

「おはよう八神君」

「おはよう綾瀬」

オレの席の隣。

頭の良い「綾瀬 芽衣」だ。
授業中は助けてくれることが多いから優しいヤツだろう。
運動は・・・苦手みたいだな。

他にも知り合ったヤツは多いけどほとんど覚えてねえや。
今のところはこの2人が一番印象的かな。

「おはよう芽衣ちゃん」

「おはよう霊奈ちゃん」

「八神君も」

「おはよ。えっと・・・」

「桐生 霊奈」

「ああ、霊奈」

オレよりも身長が小さく、自分よりも長いんじゃないかってぐらいの長い髪。

黒い瞳に幼い顔立ちの少女。

オレのクラスメイト「桐生 霊奈」だ。

こういうやつかはまだよく判らない。

「八神君は霊奈ちゃんとは初めて話すよね」

「私は質問の時、迷惑かもって思ったから話しかけなかったの」

「そうなのか？ だったら今質問に答えようか？」

「んゝ、それじゃゝ」

少しなやみながらもどんな質問をしようと考えている霊奈。
どんな質問でもどんとこいだ!!

「八神君って・・・何か不思議な力とかもってる?」

「え!?!」

「霊奈ちゃんね陰陽師の家の末裔なの」

「驚いたって事はもってるんだね」

「ま、まさか! 質問が突飛過ぎてビックリしただけさ。そんなの今まで身に覚えがないしな」

「へゝ、そうなんだゝ」

マジでビックリした。

いきなりそんなこと聞かれた上に、持つてることを見抜くなんて。

「ど、どうしてまたそんな質問を?」

「八神君の後ろの方に何か憑いてるみたいだから」

「へ?」

「後ろの方になにか動物みたいなものが見えるの。心当たりある?」

「へく視えるんだ。んく心当たりね。その動物って何？」

「なんだろう。狐・・・かな」

「狐って事は・・・タマモ・・・？」

「心当たりあるの？」

「い、いや、何もないかな。特には。変なこと聞くようだけ、どう
いう表情してる？」

「物凄く笑顔。憑いてるって言うよりも見守ってるって感じがする
な。私的にはだけど」

「そっか・・・。ならいいんだ」

笑顔ってことはおいてきたことを怒ってないってことだな。

それならいつでも迎えに行けるな。

でもなんで幽霊？

まさかタマモ死んじゃったの！？

「あ、なんか怒ってる。え？何？『私はまだ死んでません！』だっ
て」

「あ、そうなの？と言うか話せたの？それとオレに憑いてることは
死んじゃったのかなって思ったから。でもどうしてだろう？」

「私にもわからない。気が向いたら家に来て。除霊とかいろいろし
てあげられるから」

「ああ、ありがとう」

なんかんやでホームルームの時間が来た。
と言うか霊奈すごいな。

霊と話せるなんて。

（1時間目）

1時間目は英語。

まあ、たぶん大丈夫だろう。
いつも通り、いつも通り。

「この日本語を英訳してみろ八神」

問題は『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』か。
なんだ簡単じゃん。
これだったら答えられる。

「えっと・・・This is the bookshelf
that my grandmother had used re-
gularly. です」

「・・・は？」

「あれ、間違っていました？だったら・・・This is the
bookshelf that my grandmother
used regularly. でしょうか？」

あれ？本当に何かミスった？
今回ばかりは正解したと自信があったのにな。

「や、八神。今なんて言った？」

「だから・・・This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.とThis is the bookshelf that my grandmother used regularly.のどっちですかって」

「え、えっと・・・一応どちらも正解だ。後に言ったほうが意味は適切になるな。とりあえず座っていいぞ」

何が起きてかわかっていない全員。

クラス全体が異常なほどに静かだった1時間目でした。

く飛びまくって昼食く

「おい八神、飯食おうぜ」

「わりい、先客いんだ」

「あ！おい！先客って・・・」

前原を振り払って屋上へ向かう。

朝に昼になったら弁当を持って屋上に来いって言われたからな。
たぶん一緒に食べるんだろう。

「友紀！こっちこっち！」

「はやて、声大きいよ」

「あ、ごめんごめん」

呼ばれた場所まで行くと金曜みたメンバーがいた。
5人そろって仲いいですね。

オレが入れそうな余地は何もないや。
しかも周りの視線が怖い。

「さ、友紀も来たことやし食べよか」

「賛成！」

全員弁当を広げて食べ始まる。
無論オレもだ。

あ、うま・・・。

「午前中聞いたで。英語の時間すごかった見たやな」

「別に何かしたわけでもないのにみんな黙っちゃうんだもん。ただ普通に問題に答えただけなのに」

「その問題って？」

「『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』って問題です」

「答えてThis is the bookshelf that my grandmother had used regularly. よね。難しい方だけど答えられたの？」

「え？あの問題って難しい方なんですか？それとアリサ先輩が今言

ったほうも正解ですけど、正確にはThis is the bookshelf that my grandmother used regularly.の方が正しいそうです。ちなみにオレはそのどちらも答えました」

「え？今なんて？」

「なんで先生と同じこと言ってんですか」

まさかここでも全員黙るか。

本当にオレが何したんだよ……。

「友紀君すごいね。外国いたから得意なの当たり前なのかな？」

「オレ英語は全然覚えてないよ？得意な訳ないじゃん」

この後昼食中ずっと問題を出され続けた。

無論全部答えたがな！

そのおかげでこの日からオレはアリサ先輩を英語だけ追い越せると認定された。

後輩に負けたとアリサ先輩は落ち込んでいた。

この話は職員室、全学年の教室、と言うか学校全体で噂になっていたそう……。

第05話 英語だけ天才的（後書き）

友紀のクラスメイトを募集中！

思いついた人は遠慮せず描きこんじゃってください！！

第06話 誕生日（前書き）

今回から咲夜月 黒蝶さんの提案してくれたキャラが登場します。
設定は友紀とは全員知り合った状態で、女子のメンバー全員が友紀に好意を寄せます。

それと友紀の設定をちょっと変更です。

「これはゾンビですか？」の友紀の髪型ではなく、後ろの下の方で束ねるようにしました。

それと誕生日を5月15日とします。

第06話 誕生日

現在5月中旬(?)の15日。

最近ちよつといろいろあったけどなんなく過ごしてる。

今の時期はちょうど肌寒かった春から抜け出してちよつとあったかくなってきた頃だ。

ま、オレには関係ないけどな！

だっていつも半袖で出歩いてるし。

でも寝る時は長袖だぜ？

ま、そんなことは置いといて今日も学校だ。

1ヶ月近く経ってある程度クラスのメンバーも覚えてきた。

このクラス、ホント楽しいヤツばっかで毎日にが楽しいぜ！！

「って言う事なんだけど八神君わかった？」

「いや、さっぱり」

今は帰り道。

姉ちゃん是用があるから先に帰ってるそうだ。

オレは成績のせいで居残り。

何人かは手伝ってくれて少し早く終わらせることが出来た。

最近では綾瀬と前原、霊奈と結構気の合う『朝霧 香魚』。

言ってる事はオレにとってちんぷんかんぷんだけど頭の良い『滝岡

咲夜』。

京都から来た天才『神姫 亜美南』。

そして良いところがある『藍咲 鈴兎』の8人で過ごしてる。

亜美南は神出鬼没で一緒にいる時間少ないけどな。

「やっぱり友紀はバカだな」

「逆にわかる方がすげえよ!!」

「あ、私達こっちだから」

「おう、それじゃ、明日な」

「うん、じゃあね」

途中で分かれ道に差し掛かった時、霊奈と香魚、綾瀬が別れた。
残ったのは前原、咲夜、鈴兎、オレの4人だ。

「それにしてもやっぱ八神がうらやましいぜ」

「ああ、そうだな」

「あんな美女の先輩と同じ家に住んでるなんて」

「兄妹なんだから同じ家に住むのは当たり前だろ」

「住むだけだったらまだいい……。だがこいつはそれ以上の事を
しているはずだ!!」

「してねえよ!!」

「そういうながらも毎日一緒に風呂入って、一緒に寝てんだろ？」

「そ、それは・・・」

「なんだと!?!それは初耳だ!!」

「違う！無理やりだ！無理やり！一緒に寝るのは部屋が無いから！」

「いま、さらっと認めたな」

「あ」

「何たることだ！八神！その権利を俺によこせ！！」

「どうやってだよ！？」

いつもこのメンバーになるとこんな会話になる。

迷惑だけどこんな会話、向こうでは出来なかったから楽しいぜ。

そんなこんなでこいつらと別れて家へ帰ることに。

今日はなのはさんたちも来てんのかな？

靴がたくさんある。

「ただいま」

ドアを開けて玄関へ入ると急に大きな音がした。

パン！

パン！

急なことでビックリした。

たぶんクラッカーだろう。

『誕生日おめでとう！！』

「へ？」

未だに何のことかわからなくて混乱している。
誕生日ってオレの？

「今日で13歳やな」

「おめでとう」

「あ、ありがとう」

そう言えば今日は5月15日だ。
と言う事はオレの誕生日じゃないか。
でもなんで知ってるんだろう。
教えた覚えもないのに。

「実はグレアムおじさんに聞いててな。友紀の誕生日はいつですか？って」

「だから今日、サプライズパーティーをやろうってなったんだ」

「本当は私の家でも出来たんだけどサプライズだから、ばれたら大変かなって思って、はやてちゃんの家にしたんだ」

「早速やけどこれ、誕生日プレゼント」

「ありがとう。これは？」

「友紀って欲しいものとか言わんやろ？だから何がいいか迷ったん

よ。それで、身に着けられるものだったらええかなって思ってたにしたらんや」

小さな箱。

開けてみると中には髪留め。

時計とか高価なものじゃないけどそんなものじゃなくてもいい。ただ気持ちさえこもってればそれでいいと思う。

「ありがとう姉ちゃん。大切にするよ。付けてもいい？」

「ええよ」

髪留めを口にくわえて髪を結う。

髪量がちょっと多めだから結構集まるな。

そして片手で押さえてもう片方で髪留めを使って止める。これでよし！っと。

「どうかな？」

「うん、似合うな」

「ははは、オレ一応男なのにな・・・」

なんでか涙が出た。

理由なんてわかりきってるようでわからない。でも悲しくて泣いてるんじゃない。

それだけはわかった。

「友紀・・・」

「あれ、おかしいな……。泣く理由なんてないのに……」

今まで誕生日なんて祝ってもらえなかった。

初めて祝ってもらって、初めてプレゼントを貰って、それだけなのに涙があふれて止まらない。

嬉しいのかすらもわからなかった。

「……。泣きたい時は泣くのが一番や。だから今は泣いとき」

「……。うん」

姉ちゃんに抱き寄せられていつもだったら飛び退くのに、今は違う。胸の中で静かに泣き続けた。

周りに誰かがいるなんて関係ない。

ただ涙が枯れるまで泣き続けた……。

第06話 誕生日（後書き）

なんかちよつとしたシリアスな回。

グレアムは誕生日を知っていても祝いに行つてあげられない。

でもこっちに來て初めて祝ってもらえてうれしかったんですね。

話を変えて次回はどうな回にしようかな。

出てくるメインキャラは香魚にしたいと思っています。

なので今回は香魚が多く出て來ます。

と言うか今回全然出てきてねえw

現在も友紀のクラスメイトを募集しています。

面白そうなキャラとかを思いついた方は遠慮せず書き込んでください。

今ならほぼ確実に採用されると思います。たぶん

第07話 邪魔のない毎朝

昨日の誕生日で泣いてしまい、慰めてもらって、兄妹や家族がいるのは本当にいいなって改めてわかった。

プレゼントとして貰った髪留めはありがたく使わせてもらっている。男だけど似合っていればいいんだ！

話を変えて最近の日課は――

「おはよう、友紀」

「おはよ香魚^{あゆ}」

毎朝超早起きして日の出を見ることだ。

これは香魚^{あゆ}に誘われて行ってみたら意外にきれいだったから毎日一緒に行くようになった。

それに前までは『投炎』のための時間もあんまり取れなかったし、ちようにいいかな。

「あ、その髪留めどうしたの？昨日までは付けてなかったけど」

「これ？昨日誕生日だったから姉ちゃんに貰ったんだ。似合ってるか？」

「うん♪すごく似合ってる」

香魚^{あゆ}はオレとも気があって、意外に一緒にいることが多かもしれない。

本人は運動が好きらしいけど、どちらかと言うと本を読んでもる方が

好きらしい。

家に図書室があるくらいだ。
本が好きなんだろう。

「よし、着いたぞー！」

「ハア、ハア、友紀、早いよ・・・」

「あ、ゴメンゴメン」

「ハア、ま、いいわ。おかげで間に合ったみたいだし」

海の方こうを見てみれば太陽が顔を出し始めていた。
何度見てもきれいな眺めだ。

「ほい」

「ひゃあ!？」

「あははは、驚いた？」

「い、いきなり何するのよ!？」

「ゴメンゴメン。でも喉乾いてるだろ？」

「・・・あ、ありがとう」

「どういたしまして」

今さっき買ってきたドリンクを香魚の頬に付ける。

突然そんなことされれば誰だって驚く。

逆に言ってしまうえば驚かない人はいないだろう。

香魚^{あゆ}も期待通り驚いたようだ。

この後2人は走って家まで帰った。

（ちょっと時間は過ぎて八神家）

「^{フレイム}投炎・^{オン}開始」

現在5時を回ったところ。

友紀は誰も起きていないのを確認して『投炎』の練習をしていた。

（炎を出して、形を想像し、その形へ変えて、強化し、硬化させる・
・・）

目を閉じ、想像をして作り出す。

数秒の間を置いて両手に2本の剣が現れた。

『干将・莫耶』

頭に浮かんだその剣を作り出した。

色などは真紅だが形は本物と間違うほど同じで、重さも同じように重い。

なぜそれが頭に浮かんだかは不明だが気にする必要はない。

「んー、ちょっと構成が甘いかな。もう一回・・・。^{フレイム}投炎・^{オン}開始」

両手に出した剣を撃ち合わせ砕け散ったのを確認するともう一度やり始めた。

今度はさっきのよりも鮮明に想像し、炎をさらに熱く滾らせ、さらに固く強化し、作り出す。

「よし、これはもういいだろう。後は・・・」

再び目を閉じて形を想像する。

長く、大きく、力強い形。

奇妙な形の大剣。

「おっと。ふう、こっちはやっぱり作るの難しいな。ふんっ！」

作り出した大きな剣を拳で思いっきり叩くといとも簡単に砕けた。
どうやら失敗のようだ。

「なんだろうな……。今一つヒントが足りないんだよ……」

この後もずっとシグナムが起き続けるまで『投炎』の練習をしていた友紀だった。

くさらに時間経ちく

「おい！友紀！」

7時30分を回ったころ。

そんな時間帯に大きな声で友紀を呼ぶ声が聞こえる。

呼んだのは早朝一緒だった香魚^{あゆ}だ。

最近是学校まで一緒に行ってるらしい。

「ちょっとまって！姉ちゃん、オレ先行ってるよ？」

「了解や。ウチはもう少ししたら出るよ」

「ん。じゃ、行ってきます！！」

「行ってらっしゃい」

鞆を持ってドアを開ける。
目の前には香魚^{あゆ}がいた。

「おはよ」

「おはよ」

本日2回目の挨拶を交わして歩き始めた。
話しながら登校するのはいつもの事。
何故か間に入ってくる者は誰もいない。
今日もそんな日常が始まった。

第07話 邪魔のない毎朝（後書き）

これだけを見ているともう「お前ら付き合っちゃえよ・・・」見たいなセリフが出そうですw

とりあえず香魚^{あゆ}をメインで、と言うか出たのが香魚^{あゆ}しかない（笑）あと数行だけはやてが。

毎朝こんな日常を送り続ける友紀は幸せ者だね。少し羨ましい限りだよ。

さて次回はどんな内容にしようかな？

まだまだ考え中です！

現在も友紀のクラスメイトを募集中です。

考えついた読者の皆様、遠慮せずにじゃんじゃん描いてください！！良かったアイディアは採用したいと思います！！

第08話 覚醒の芽

今度の夢は本当にたまに見る夢だ。
その夢は悲しくもなんともない夢。

みえるのは赤と黒の服を着た凜とした背中。

髪の毛はオレよりちよつと長いくらいで、オレと同じように髪を後ろで束ねてる。

両手には真紅の短剣。

毎日作ってるあの剣だ。

そしてすぐそばにはいつも作ろうとして失敗する剣とほとんど同じような異様な形をした大剣。

その3つの剣を使いこなして戦っている姿がみえるんだ。

いつも見える凜とした背中 of 傍らには3人の従者らしき人たちと肩には小さな人。

1人は視えない剣を持っていて、風を操っている。

1人は小さな銃を2つ、超銃を1つ持って他の人を援護している。

1人は剣だったり、剣斧だったり、槍だったり、いろいろな武器で戦っている。

小さな人は尻尾と狐耳を生やしていて、炎を操って戦っている。

何で戦っているのだろう。

何と戦っているのだろう。

そう思う事があるけれど今のオレじゃ考えても答えにたどり着けない。

そもそも何でこんな夢を見るかすらわからない。

そのことを考えていると時間が経って、他の人の言葉が耳に入らなくなる。

今だってそうだ。

オレはどうしてこんな夢を見たりするんだろうか。

やっぱりいつになっても答えは見つからなくて、たどり着けない・・・。

「おい八神。何ぼーっとしている！」

「え？」

「ちゃんとノートを取らんか！」

「す、すみません・・・」

気がついた時は授業中。

だいたい3時間目後半らへんだ。

ノートはほとんど白紙でとっていない。

どれほどの時間考えていたんだろう。

黒板はびっしりと埋まっていた。

とりあえず大急ぎでノートを取ってその授業は終わった。

く休み時間く

「はあ・・・」

「どうしたの？友紀がそんなにテンション低いのは珍しいわね」

「亜美南あみな・・・」

話しかけてきてくれたのは京都の天才『神姫しんき 亜美南あみな』だ。

「何かあったの？」

「い、いや、なんでもないんだ。うん、なんでもない」

「そお？ならいいけど」

「悪いな、氣い使わせちゃって」

「いいのよ。困った時はお互いさまってヤツよ」

亜^{あみな}美南はオレに声をかけてからその場を後にした。

でも、こんな夢の事なんて誰にも話せない。

話せたとしても「考えすぎだ」って言われて終わりだ。

だから1人で考えるしかない。

いつ答えを見つけ出せるかわからないけどな。

く帰り道く

「今日はどうやった？何か面白い事とか」

「特にはないよ。まあ、前原とかがある意味面白かったけど」

「そか」

今日の学校生活全部夢の事を考えて終わってしまった。
なんだろう。

たまにこういう日があるけど一日全部使うなんてめったにない。
おかげでクラス全員から心配されてしまった。

中には「トモノリが恋したぞ！」なんて言うやつが出てきた。
そのせいでクラス中全員が誤解して、誤解を解くのが大変だった。

2年とかに知れ渡ってない事はいいことだ。

「なんか具合悪そうやな。ちょっと早く変えろか？」

「大丈夫だから。オレはなんとも——っ!？」

続けようとした言葉が止まる。

眼の前には異様な殺気を放った男性。

なんでだ？

姉ちゃんを狙うのは誘拐目的とかでわかるがそれなら殺気を出す必要はない。

むしろ消さないといけないだろう。

しかもオレを見ているのがわかる。

つまりオレを狙ってるってことか？

あいつはただこちらを見ているだけ。

確実にわかるのは姉ちゃんをこいつからはなした方がいいことだ。

「ね、姉ちゃん」

「・・・？どないしたん？」

「オレちよつと忘れ物あったから取りに戻るよ。出来るだけ早めに帰るからさ」

「わ、わかった。気をつけてな」

「うん」

学校方面に向けて走り出す。

後ろをチラ見すると男の姿はない。

こっちに來ているのだろう。

「ハア、ハア、で、何の用だ？」

ある程度走ってから立ち止まり振り返る。

場所は廃棄工場だ。

ここなら誰もこないだろうし、姉ちゃんも心配して探しに來てもみつけにくいはずだ。

「自分を狙っているとわかり、身内を引き離すとはいい考えだな」

「そんなことを聞いてんじゃねえ。オレに何の用だって聞いてんだ。言っとくがオレはお前と面識はない」

「なに、簡単なことだ。お前の持っているロストログアを渡してほしいだけだ」

「ロス・・・なんだ？」

「ロストログアだ。お前から反応が出ている。言い逃れは出来んぞ」

「知らねえな」

「しらを通すならそれで構わない。それならただお前を殺して奪うだけだ」

その言葉と同時に手元に剣が現れる。
現れると同時に服も変わる。

一体何がなんなのかわかんねえよ。

そんなことを考えているいきなりあいつは突っ込んできた。
懐に入られる。

このままくらえば死ぬ。
そう直感的にわかった。

「死ね」

「っ！？^{フレイム}投炎・開始！^{オン}」

『干将・莫耶』を投炎して応戦する。
だけど衝撃はそれを通じてじかに伝わってくる。

「ぐはっ！」

「ほう。今のを防いだか」

「ハア、ハア、ハア」

「だがその程度では俺を倒すことは出来ん」

この後ずっと同じ事が続いた。

攻撃を防いでは突き飛ばされ、投炎した武器は碎かれる。
起き上がって作り出してはまた防いで碎かれる。

フレイムロードを使って上へ逃げても飛んできて同じ状態になる。
たとえ逃げようとしても追いつかれるのがオチだ。

斬られて服は破けて、薄皮とかも斬られて腕や脚は血だらけだ。

「ハア、ハア、ハア」

「なかなか粘るな。だがこれで終わりだ」

剣を上に掲げる。

空中に無数の弾のようなものが浮かび上がる。

直感的に、本能的に思った。

くらったらず瀬死は免れないだろうと。

（オレはここで終わるのか？いつも見る夢の答えを見つけ出してないのに？大切な家族を残したまま？タマモにも会っていないのに？）

弾の数はどんどん増えていく。

だいたい16ぐらいだろうか。

（・・・ふざけんよ！訳もわからないまま、死んで行くなんて！オレはまだ死ねない！理由なんてない！ただ生きていたい！）

「死ね！」

（？なんだこれ？胸が熱い。滾るように、燃え盛るような熱さ。炎に包まれているような熱さだ。なんだか落ち着くな。そんなことはどうでもいい。・・・なんでもいいんだ。生きていられるならなんでもいいや・・・）

右手を眼の前に出して頭に浮かんだ言葉を呟いた。

本当に聞こえないぐらいの、自分でもなんて言ったかは頭でしかわからない。

「熾烈極めし七つの炎・・・」
フレイム
ファイアス

眼の前に大きな炎が現れた。

七つの色で、オレを守ってくれている。
この時の意識なんてほとんどなかった・・・。

第08話 覚醒の芽（後書き）

今回ついに敵が登場。

こいつは何者なのか。

それは次回わかるかもしれない！（もしかしたら描かないかもしれません）

ちなみに今回最初の方に出てきた『従者』達は灼熱神書の守護騎士プログラム達です。

『小さな人』がわかるようにタマモです。

デバイス名はまだ決めておりません。

キャラ名は決まってるんですけど・・・。

次回はどんな内容にしようか迷ってます。

今回の続きからどんな内容にするかな。

今回は面白要素が全くなかったので次回は出来る限り取り入れたいと思います。

（面白要素はいつもあんまり入ってないと自分は思っています）

現在も友紀のクラスメイトを募集中。

思いついた人は遠慮せず書き込んでください！

感想も待ってます！！

第09話 覚醒した力の一部（前書き）

今回は面白要素ゼロです。

なんとなく描いていたら戦闘描写だけになってしまいました。
ですが楽しんでくれたらうれしいです。

第09話 覚醒した力の一部

「熾烈極めし七つの炎・・・」
フレイム アイアス

そう小さく呟くと手のひらから大きな炎が現れた。
七色の炎はオレを守ってくれている。

なんだか落ち着くようなあったかさもあった。

意識は朦朧としていて、色でしか判断できない。

その内、気を失いかねない。

そう思っていると予想通り意識を失ってしまった。

side out

「まさか俺の魔力弾を全弾防ぎきるとは。威力は強めだったのにな。
ま、いいだろう、これで終わりだ!!」

剣を持った男は友紀の目の前に立つやいなや剣を振り上げる。
そして振り下ろそうとした時だった。

剣は友紀の首筋ギリギリの所で止まった。
いや、止められたのだ。

「何のつもりだ？ ウエイバー」

「それはこっちのセリフだ。ルールを破る気か？ スザク」

槍をもった男、ウェイバーと呼ばれる男は剣を止めて友紀を助けたのだ。

「ガキは殺さない。ガキからは奪わない。それが俺らのもつとーのはずだぜ？」

「ならどうしろと言うのだ？こいつからどう奪えと言うんだ？」

「どうしても欲しけりゃ待て、せめてこいつが15以上になるのをな」

「あと、2年以上だと？そんなにもたもたしていたら管理局に——うっ……！」——なに！？」

言葉を続けようとしたスザク。だがそれは続かなかった。

驚愕のものが目に入ったのだ。

ほぼ動けるはずのない友紀が立ち上がったのだ。

しかもさつきとは全然違う。

雰囲気がまるで別人なのだ。

「まさか。あそこまで痛めつけて立っていられるなんて……！」

「こりゃ驚きだ。相当根性があると見えるな。もしくはただのバカか……。スザク、気絶させる程度ならやってもいいぜ」

「言われずともやるさ」

じゃっかんふらふらとしている状態の友紀に対して走り、斬りつけようとするスザク。

だがそれは当たらなかった。
否、かわされたのだ。

「な!？」

「・・・」

「挑発してる・・・。ふっ、俺も参加しろってか? いいじゃねえか
やってやるよ」

片手をあげ、指で挑発をする友紀。

その眼はもう別人だ。

いつもの友紀ではない。

「非殺傷設定だが、もしかしたら穴あいちまうかもしれない
か。貫け! スラスト! !」

『イエス!!』

「・・・はっ!」

槍の突きに対して片足を振り上げてかかと落としをするように叩き
落とす。

かかとの先には槍の先端。

そしてそのまま足に力を入れて、槍を地面にたたきつける。

「な!？」

「俺を忘れてもらっては困るな!」

「・・・フレイム投炎」

上から斬りかかろうとするスザクに対し、『干将』だけを投炎して受け止める。

そして2人から距離を取った。

「あゝあ、制服がぼろぼろだよ。どうしてくれんだよ」

喋り方もどことなく違う。

本当の自分がどこかに行ってしまったように、別人のように見える。

「あ、いいか。とりあえずお前らをぶったおしてから考えるか。先に、剣を持ったお前からだ。・・・フレイム投炎・オン開始!!」

両手を横に出して眼を閉じる。

両手には『干将・莫耶』が現れた。

それを相手に投げつける。

「――しんぎ鶴翼、むけつにしてばんじゃく欠落ヲ不ラズ」

投げた剣を防ぐスザク。

ただ投げられただけなのに、防いだけで押されてしまった。

「――ちから心技、やまを泰山ニ至リ」

防がれたのを確認するやいなや、すぐさま新しい剣を作り突撃する。そして押されて隙が出来ている間に切り刻む。

さらには切り刻む途中で飛ばした2本が戻ってきてスザクに追い打ちをかける。

「――心技、黄河ヲ渡ル。これで終わりだ」

斬り抜いた後に、剣を大きく作り直し、オーバーエッジにした。そしてそれでフィニッシュをかける。

最後の一撃でスザクは気を失ったと同時にオーバーエッジは碎け散った。

「・・・っ。やっぱりオーバーエッジの持続は無理か。基本骨子、構成が元の物とは全く違うからな。一応、フィニッシュ用として使うか」

「こいつは驚いた。まさかスザクを気絶させるなんてな」

「こんどは、お前の――」

そこで再び友紀は倒れた。

体力の限界、なれない戦闘、初めてとは思えない動き、その他もろもろを含めてこれ以上の継続は出来なかった。

この後ウェイバーは気絶したスザクを転送した後、友紀に治癒魔法をかけて目立った怪我を直し、さらにはどうやってかは知らないが制服を直してあげた。

さらには、今回の戦闘他の記憶を消去改残をしてあげるなどの事をした。

このウェイバーとスザクは誰なのかは未だ謎だ。

side out

ピンポン

インターホンが鳴る音がした。

時間はだいたい7時30分を回ったところ。

はやて達は友紀を探しに行つて、見つからず一旦家に帰つてきたところだった。

「はーい」

「あ、夜にすみません」

「えっとどちらさまで？」

インターホンを鳴らした男はウェイバー。

私服姿で、気絶、もとい眠っている友紀を背中にしょつてきたのだ。

「俺はこの辺りに住んでるものです。えっとこの子の・・・」

「あ、友紀！」

「よかった。家があつて。この子、道端で倒れてて」

「え!？」

「最近、通り魔みたいなのがいるって噂があつて、たぶん襲われる際に気絶させられたんでしょう」

無論、嘘だ。

「自分達と戦闘をしていて気絶したから連れてきた」なんて一般人には言えないだろう。

さらには魔法の事を、魔法文化のないこの地球で言うのもいけない

だろう。

住所は、鞆の中にあつた携帯を見て知つたそうだ。

「失礼ながら鞆の中を見させてもらいました。金目のものはおろか何も取られてなかったみたいで、良かったですね」

「わざわざありがとうございます。何かお礼を」

「いや、いいですよ。それに俺、これから用事がありますから」

「そうなんですか？ならこんど」

「はい」

この後ウェイバーは八神家を後にした。

帰り際にはやてには聞こえないように、小声でつぶやいた。

「思いだしたらロストログアを追い続けろ」と。

第09話 覚醒した力の一部（後書き）

今回出てきたキャラ『スザク』と『ウェイバー』

この2人は後のstrickersでも出てくるキャラの内の2人です。

『スザク』の場合は剣を主体に、『ウェイバー』は槍が主体のキャラです。

『スザク』は元ネタも何もないんですが『ウェイバー』は「Fat e」のアニキ（ランサー）が元ネタです。

『ルール』は「ガキは殺さない、ガキからは奪わない。どうしても欲しければ待て」と言うルールです。

理由は「後味が悪い」からだとか・・・。

次回からは普通の日常を描いていこうかなって思っています。

今度こそ面白要素を入れたいと思っています！！

最後に友紀のクラスメイト募集中です。

第10話 兄妹だからっていい事と悪い事があると思う b v 駄作者（前妻

全然面白い事思ネタいつきません・・・。

なんか面白より普通の小説つと化していますね。

とりあえず楽しんで読んでくれればうれしいです。

第10話 兄妹だからってしていい事と悪い事があると思う b v 駄作者

（否定するなよ。なあ？）

頭の中に直接話しかけてくる声。
オレとほとんど同じような声だ。

（お前は戦いに生きる人間だ。戦いから逃げることなんてできない。
生まれた時から決まってるんだ）

（お前は・・・誰だ？）

（わかってるくせによお。俺はオレで、俺はお前だ。そしてお前は
俺で、オレは俺だ。つまり同じなんだよ、俺とお前は）

（オレ・・・？）

（ああ、そうだ。生まれた時から今までずっと一緒だったじゃねえ
か。なのに今更否定すんなよ）

（し、知らない・・・。オレは・・・お前なんか知らない・・・）

頭の中で何度も否定する。

”自分はそんな奴じゃない！”

”戦いなんて出来ない！”と。

何度も何度も否定する。

（今はそれでやり通せるが、それじゃ無理だ。いつか必ず時が来る。
戦う時がな）

(うるさい！うるさい！黙れ！！オレは・・・、オレは・・・)

「オレは！！！」

体を起こしながら叫んだ。
全身汗だくで、息が荒い。

「友紀・・・」

「ハア、ハア、姉ちゃん・・・？」

「よかった。うなされとったから」

「・・・オレ、どうしてたの？」

「昨日、忘れ物取りに戻ってからずっと帰ってこないから心配しとったんよ。それで、最近通り魔がはやってるらしくて、友紀は襲われたらしいんや」

「らしい？」

「近所の人が倒れているのを見かけて連れてきてくれたんよ。それからずっと眠りっぱなしや」

昨日のことを思い出す。

帰り道の途中で学校に忘れ物をしたのを思い出して姉ちゃんに先に帰ってもらったんだ。

そして、振り返って戻って行く途中で記憶が無くなってる。

「ちなみに今日は学校を休みにしとったから」

「あ、ありがとう」

「本当に大丈夫？ 顔色悪いで？」

「うん、大丈夫だから」

頭の中で何かが違うと言っている。
なんだ。何が違うって言うんだ。
わからない。

「それにしてもホンマによかったわ」

「うわっ！ ちょ、姉ちゃん・・・！」

いきなりオレに抱きついてきた姉ちゃん。

思いつきり抱きついてるって事は相当心配してたって事だろうか。

「もし、友紀が大変なめにあってたらどうしようかと・・・」

「・・・ごめん、心配させて。でもほらこの通り」

手を握ったりひらいたりして平気なことをアピールする。

それでもまだ不満そうな顔をしているようだ。

「それより、オレ腹減っちゃったからさ。なんか食べないと」

「それならウチが持ってくるよ」

「いや、いいよ。自分でとってくるからさ」

「友紀はここでじっとしとく！ウチがとってくるから」

「いやでも、そのくらいはでき——おわっ！！」

「うわっ！！」

体がふらついて倒れてしまう。

その勢いで眼の前にいる姉ちゃんを押し倒してしまった。
だがなんだろう。

この唇にある感触は・・・。

「・・・」

気がつけばおかしい状況。

オレは今、姉ちゃんとキスをしている。

早く離れないといけないのにこんな時は何故か体が動かない。

「・・・」

どれくらいの時間が経ったんだろうか。

数十秒だとしてもオレにとっては物凄く長い時間だ。

「・・・ご、ごめん」

「・・・う、うん」

少し経ってから離れる。

謝ったけどなんだか微妙な空気だ。

「ウチ、下からご飯取ってくるから友紀はそのまま休んでな」

「うん。ありがとう」

部屋を後にして下へ降りて行った姉ちゃん。
その背中を見ているしか出来なかった。

「唇、やわらかかったな・・・」

何故かこの言葉が漏れてしまった。

今回は少し短めになってしまいました。

なんとなくこんな展開にしてみたんですけどどうでしょうか。

ネタがないんで楽しくなかったらすみません。

現在も友紀のクラスメイトを募集中です。

思いついた人は遠慮せず書き込んでください。

あと今回からネタも募集してみたいと思います。

こんな展開があったらいいなとか、あんな展開が面白そうだとか、思いついた方は描きこんでください。

どうしても思いつかなかった時、物凄く面白そうだと思った時に使わせてもらいたいと思います。

第11話 埋まっていたピース

「そういえばなんだかんだでオレの初めてだったな」

さっきの不可抗力でしてしまったキスのことだ。

意外に長くしてしまったため感触がまだ残っている。

「それにしても……。っは！ いかんいかん！ 違うことを考えろ、違うことを！」

今、さっきの事を考えてたらいけない気がする。
むしろ考えては社会的にダメだと思う。

（そう言えばあいつ、あんなことも言ってたっけ）

眠っている時。

頭に直接響いてきた声。

言っていた事は他にもあった。

「お前に足りないものは、戦いに対する意識だ。常に戦いの事を考えてやってみろ。おのずと答えは現れる」と。

（戦いに対する意識か……。どんな風にすりゃいいんだよ）

ちよつとの間だけ考えた。

戦いに対してどうすればいいかを。

（ま、やってみればわかるだろ。投炎・開始・オン・・・・）

想像するは失敗ばかりする異様な形の剣。

赤く、ねじれ、するどく。

通常よりも多くの炎を、通常よりも強力な強化を幾度となく一瞬のうちに繰り返す。

やがては巨大な剣となり手の中に現れた。

「・・・！なんだこれ！？」

真紅のねじれた剣を手にした瞬間驚愕した。

異様なまでの重さがあるはずなのに、おそろしく軽く。

拳で叩いても砕けず、さらには異様な雰囲気醸し出している。

身の丈ほどある剣はまるで自分を求めているようにも思えた。

見ているだけでそれがわかるほどに。

だが同時にうかつでもあった。

これほど強大な力を発しているような剣を誰も気配すらきずかないと言うのはおかしい。

ましてや管理局員のはやてが魔力を感じ取らないと言うのもあるはずがないのだ。

「友紀！」

当然、友紀が作り出した剣の魔力を感じ取ったはやてはすぐさま部屋にやってきた。

上へあがってくる足音を聞いた友紀はすぐさま剣を消した。

「姉ちゃん、どうしたの。そんなに慌てて」

「へ？ ああ、えっと・・・」

部屋の中は案の定何事もなく友紀1人だった。

怪しい人はおらず、とうの友紀は何の変哲もない。
そのせいで言葉が詰まってしまったのだ。

「あゝ、その、なんか食べたいものあるかなゝって」

「食べたいものねゝ。何でもいいかな。とりあえず食べやすければ何でも」

「わ、わかった。ちょお待ってな。今作るからな」

こうしてまた部屋を後にしたはやて。

部屋を出て行ったのを確認した友紀は安堵した。

「よかったゝ。ばれたらどうしようかと思ったゝ」

ばれた時はどうするのかはわからないがとりあえず一安心ではあった。

「そう言えば気にしてる様子ではなかったな……。っは！これ以上あのことを考えてたら無限ループだ！」

ゝ結果無限ループして夕方ゝ

（け、結局一睡もできなかった・・・）

夕方までの時間。

食事を取った後はおとなしく寝ようとしていた友紀は未だにあの事を引きずっていて一睡も出来ずにいた。

（姉ちゃんもあれ以降顔合わせてくれないし。それに――）

「友紀！お友達やで！！」

「こんなタイミングだと必ず誰か来るんだよな……。今、行くよ！！」

寝間着姿のまま下に降りて玄関へ向かう。

こんな時は本当に嫌な予感意外しないものだ。

「調子どうだ？」

「これはまた大人数で来たな」

人数はいつも一緒にいるメンバー。

計7人だった。

「元気が取り柄の友紀が休む方が珍しいんだよ」

「いつも元気だからみんな心配して来てやったのにな」

「バカは風邪ひかないとか言うのにこいつが休むほどのとはな……」

「ま、なんにせよ元気そうで良かったじゃねえか」

「呪われてなくて何よりだよ」

「オレはいつ呪われるようなことを……？」

なんだか少し懐かしく感じた会話。

気のせいだろうと思うけど悪くない。
プリント他を渡しに来たそうだ。

「さあ、はやてさんの顔を見に・・・」

「家に上がる必要はないだろう？」

「・・・ちっ」

「おい」

「今日はこんなもんでいいだろ。また明日な」

「ああ、悪りいな、わざわざ」

「いいのよ。前も言ったじゃない。困った時はお互いさまだって」

「そうだな」

この後も少しだけ会話が続いた。
夜遅くなるのもあれだったので早めに切り上げてみんな帰ることにした。

「？ 香魚^{あゆ}？」

「あ、明日」

「ああ、あれか。大丈夫だ。行けるよ」

「じ、実はね、今日寝坊しちゃって行けなかったんだ」

「そうなのか？じゃ、ある意味ナイスタイミングだったな」

「うん。だから明日は寝坊しないようにする」

「おう。夜更かしすんなよ」

会話を終えてから香魚あゆも帰って行った。
なんだろう。

嫌な予感がしてたのに何もなかったな。
それならそれでいいけど。

オレも一応明日のために早めに夕飯を食べてから風呂へ入った。
無論、姉ちゃんは一緒ではない。

嫌われたか・・・？

第11話 埋まっていたピース（後書き）

なんか少しスランプ気味です。
長く書けない・・・。

そんな事はぶっ飛ばしておいて次回はどんな内容にしようかな。
今の所何も考えていません。

ネタとアイディア他が思いついた方は遠慮せず書き込んでください。
感想もお待ちしております。

第12話 体育祭 part 1

前の不可抗力のキスがあった日から約数ヵ月。
現在の季節はめっちゃくちゃ熱い常夏。

姉ちゃんとの仲は一応仲直り(?)をした。

その日から姉ちゃんのブラコンパワーが一気に爆発。
オレはある意味で地獄にいた。

ま、愛情を向けてくれるのはうれしいんだけど、もう少し、場所とかいろいろわきまえてほしいものだ。

で、夏の季節にある学校のイベントと言えバ――

「今日は体育祭です！みんな頑張って行きましょう！！」

そう体育祭。

ちなみにオレはリレーのアンカーだったな。

誰にも負ける気はしないぜ！！

紅チームでは姉ちゃんたちもいたな。

うん、何もなければいいんだけど。

ま、なんやかんやで始まったよ体育祭。

（第一種目）

第一種目はクラス対抗短距離100m走。

まずは1年から順にやって行く。

メンバーはオレをアンカーとし、その前に香魚あゆを入れ、さらにその前に足に自慢がある3人。

ちなみにこの体育祭では点数制でクラス別優勝と、チーム別優勝がある。

クラス対抗などではクラスの得点になるのはもちろんなのだが、この得点はチームにも加算される。

逆にチーム対抗でも同じように、チームに入った得点はクラスの得点として加算される。

そのため一つの種目で逆転が大いに可能であり、さらに引き離して行けば独走できると言った状況が作りやすくなっている。

これは全て体育祭を盛り上げるためで、しかも優勝賞品が出るため全員が本気で挑んでくる。

なので私立聖祥大附属中学校の体育祭は地方でも有名な行事なのである。

『それではまず初めに1年生からの100m走です。1年生で種目に参加する生徒は準備をしてください』

準備のための放送が入る。

最初の種目はどうなるかな。

「よし！4人とも！気合い入れていくぞ！！目標は優勝賞品だ！！」

「」「」「おう！！」「」

全員がスタート地点に着いたのを確認して先生が開始の合図をする。手にはあのパンツ！！ってなるピストルが。

「位置について、よいい」

パンツ！！

気持ちのいい音が鳴り響いたと同時に最初の3人がスタートした。
ありゃ、3番目って負けちゃってるよ。

2番目、3番目もちよっと近付いたってところか。
こりゃ、きついな。

「出来るだけ距離を詰めて見せるよ!!」

「おう、頑張れよ」

「うん!」

続いて香魚^{あゆ}の番。

おお、一応距離が縮まったな。

2位と同じぐらいだなんてすげえよ。

「さて、本気でいきますか」

結果。

本気を出したらこうなりました。

1位オレ

2位、3位他クラス

うん、頑張った。

どっちかって言うとおちが遅い。

この後2年、3年の順番で回って行った。
2年チームが豪華すぎて一瞬鼻血が出そうになっとかならなかった
とか・・・。

2年メンバー男子2人なのは、フエイト、はやて。

現在の得点。

チーム得点

紅チーム

40点

白チーム

20点

クラス得点

1組（友紀&はやて達）

40点

2組

20点

3組

20点

第12話 体育祭 part 1 (後書き)

どうも楚^{ソラ}良です。

なんか一気に飛んだ感じがしますが気にしない気にしない。

とりあえず久々の更新でした。

ネタとかいろいろ思いついた方感想の覧とかに描いてください。
メッセージでもかまいません。

プロローグ 2

オレは誰だろう。

思いだそうとするけどわからない。

でも常識的な事は覚えている。

忘れているのは自分の事だけ。

オレの周りには『灼熱神書』の守護騎士。

守護騎士はオレの名前しか知らない。

そう言えば覚えてる言葉が一つだけあった。

「思いだしたらロストログアを追い続けろ」

何かを思い出したってわけじゃないけどそいつはもしかしたらオレの事を知っていて、オレの事を教えてくれるかもしれない。

だったらオレはロストログアを追い続ける。

自分の記憶を取り戻すためにな。

そのためにはまずは強くならねえと。

身を守れなきゃ記憶を探す前にぶっ倒れちまうからな。

キャラ紹介

名前.. 八神 友紀ゆき

年齢.. 18歳

性別.. 男

身長.. 小さめの166

体重.. 軽めの46

容姿.. 中学時代より少し髪が伸びている。
それでもまだ短い方。

性格.. 基本優しい

デバイス.. M・Oメテオ オリジン

灼熱神書

融合機.. 灼熱神書（管理人格タマモ）、
リインフォースアインス

備考.. M・Oは灼熱神書の持ち主専用のデバイス。

シュベルト、アローの二つの形態。

アローの場合は投炎で隕鉄の轡を作ってから連結させる。

術式.. 古代ベルカ式

変換資質.. 炎（レアスキルが関与しているため7色ある）

レアスキル…炎の印
ファイアエンブレム

魔力光…黒（アインズと同じ色）

眼の色…碧色

魔力ランク…SS+

魔導師ランク…陸戦A A 空戦A+

備考…中学2年になったころはやたと喧嘩し、家出した時にロストロギアを拾ってミッドに飛ばされる。

その際に記憶を無くしており、

たいていの常識しか覚えていない。

アインズとの出会いの詳しくは後の本編で。

守護騎士の全員に鍛えてもらい今の友紀がある。

ちなみに名前だけは全員が知っていただけで

自分の事を「ユキ」と名乗っている。

14歳の時に空港の火災から

スバルとギンガを助け出している。

その時になのは、フェイト、はやたと

すれ違う程度だがあっている。

ミッドでは『炎騎士』えんきしとして有名。

ロストロギア関連の事件にかかわり、

結果としてたくさんの人々を救った。

本人達は「ロストロギアを追っていただけ」とのこと。

今も自分の記憶を探す旅を守護騎士と共にしている。

守護騎士は大切な家族であり、道具などとは思っていない。

守護騎士達

名前..風の将リリィ

年齢..不明。外見では16ぐらい

性別..女

身長..160ぐらい

体重..描けません。描いたら切られます。

容姿..F a t eのセイバー。

わかりやすく言うtoアルトリア。

性格..シグナムの性格を柔らかくした感じ。

それでも主には敬語を使う事が多い。

スバル並みの大食漢。

デバイス..BB^{プレイフ}

備考..形で言うなら「エクスカリバー」

フォームはシュベルト、アヴァロン。

アヴァロンの場合は鞘が追加されている状態。

術式..古代ベルカ式

変換資質…風

魔力光…黄緑

眼の色…濃い緑

魔力ランク…A

魔導師ランク…A

備考…灼熱神書の守護騎士のリーダー。

炎卓騎士とも呼ばれている騎士たちの将。

もとは古代ベルカの騎士王アーサーを模している。

変換資質で珍しい風を使用する。

それを使って武器を不可視にして戦う事が多い。

必要が無いと分かれば不可視を解くこともある。

しっかりした一面もあるのだが食べ物が好き。

食べ放題だとスバル以上に食べる事もあるとか。

シグナム達夜天の騎士とはつながりがあり知り合い同士。

名前…氷の銃騎士ガウエイン

年齢…不明。だいたい20代くらい

性別…男

身長…170ちょい

体重…60ぐらい

容姿…「F a t e／E X T R A」のガウエインと同じ。

性格…シグナムに似ている。

いつも礼儀正しく接する。

友紀には主と付けずに「マスター」または

「友紀」と呼んでいる。

デバイス…GRガラティーン

備考…クロスミラージュと同じ拳銃型。

2丁銃と1本のライフル形態の二つがある。

後にティアナに射撃魔法などを教える事になる。

術式…古代ベルカ式

変換資質…氷

魔力光…水色

眼の色…紅

魔力ランク…A

魔導師ランク…A

備考…古代ベルカ式で銃型デバイスを使う珍しい騎士。

遠距離戦も出来るため信頼は厚い。

主に近距離での零距離射撃を得意とした戦法を使う。

守護騎士の中でも一番友紀と何かを計画する参謀でもある。

氷の変換資質を使うことから
ライン（ツヴァイ）に教える事も多いようだ。

名前..天武の騎士ランスロット

年齢..不明。18歳ぐらい。

性別..男

身長..170ぐらい

体重..60ぐらい

容姿..わかりやすく言うと「コードギアス」のスザク。

性格..とにかくにも元気が一番なヤツ。

一緒にいると元気になれる守護騎士のムードメーカー。
お調子者だがしっかりした一面もある。

デバイス..FS フォース

備考..剣、槍、剣斧、鎌の4つのフォーム。

槍を使うことからエリオに槍の使い方を教える。

術式..古代ベルカ式

レアスキル..己が栄光の為でなく フォーサムワンス グロウリー

備考..自らの姿を隠し、隠蔽するスキル。

なので奇襲攻撃が可能。

また、武器を隠した状態で

フォームを変えて攻撃するなど

相手の意表を突く攻撃を可能とする。

本人の真名「裏切りの騎士」に反しないスキルである。

魔力光…赤

眼の色…蒼

魔力ランク…A

魔導師ランク…A A

備考…真名は「裏切りの騎士」

かつて主を裏切りあやめた者を

模して作れたためその名がついてしまった。

本人はその事をあえて話して明るく接している。

「自分は絶対に裏切らない」と思わせるためだ。

守護騎士でももつものはいないとされたレアスキルを

もつ異業の騎士。

友紀に一番信頼されていることから

友紀だけは絶対に守ってみせると心に誓っている。

リリィの暴食を止められる唯一の人物。

その理由は後の本編で。

実力はフェイト並。

名前…タマモ

年齢…不明。フルサイズでは10歳ほど

性別…女の子

身長…リインと同じ

体重…→に同じ（殴られました）

容姿…狐耳・尻尾というエキゾチックな容姿。

「Fate／EXTRA」のキャス孤。

性格…常に友紀を愛していると言うぐらい友紀が大好き。

意外に甘えん坊な一面もある。

家族（特に友紀）をバカにしたヤツは切り裂いて、

焼き尽くして、氷漬けにして、

碎いてやると思うぐらい家族を大切にしている。

術式…古代ベルカ式

変換資質…炎、氷、風

魔力光…黒

眼の色…黄色

備考…灼熱神書の製作者が狐をこよなく愛していることから

この容姿になってしまっている。

リミッターが8個付いていて、ひとつ外すごとに

尻尾がひとつ増えていく。

全部外すと九尾となる。

3つの変換資質が付いているため
その3つを操る事が出来る。

よくユニゾンするのは友紀ではなくガウェイン。
サポート役にはうってつけだからとの事。

ほとんどを動物形態で過ごしているため
よく使い魔に間違われる事が多い。

油揚げが好物で仕方ない。

リリィに食べられた時には大泣きした事があるとか。

友紀と何回もユニゾンするアインスを羨ましがっている。
アギトとは知り合い。

「天照大見神もご照覧あれ!!」と大見栄切るぐらい
戦いで勝つ自信がある(ユニゾン時)

自分が付いていて負けるなんて考えたくないぐらいの
負けず嫌らしい。

キャラ紹介2

魔法

友紀の魔法

・投炎

一番良く使う魔法。掛け声は「フレイム・オン」。

作れる武器は色は完全な紅の「隕鉄の轡」と「干将・莫耶」

「干将・莫耶」の場合は鶴翼三連かくよくさんれんが使える。

「隕鉄の轡」なら本体と連結させ「アローフォーム」にすることが出来る。

・熾烈極めし七つの炎フレイム アイアス

わかりやすく言うローアイアス。

烈火れつか、業火ごうか、獄炎ごくえん、黒炎こくえん、蒼炎そうえん、緑炎りょくえん、紫炎しえん

の七つの炎で形成される投擲、砲撃、射撃に対して絶対的な防御力を誇る。

強度はローアイアスと同じぐらい。

・フレイムロード

文字通り炎の道。

ウイングロードと違い後ろの方は進めば進むほど途切れる。

立ち止まればその場で足場となってくれる。

これを使うことにより空中戦もできるようになる。

・陽炎影

わかりやすく言う幻術。
陽炎で作った幻影で相手を惑わす。

・業火緑炎陣

身体強化の魔法。
使うと足と手に緑の炎が灯る。
機動性がメインで上昇する。

・業火獄炎陣

身体強化魔法の強化版。
防御を捨てて攻撃とスピードをあげる諸刃の剣。

シュベルト時

・烈火大斬刀

紫電一閃のように刃に魔力をまわせて斬りつける魔法。
主に斬撃を飛ばす魔法。

・蒼炎舞

魔力をまとった剣で連続斬りをする魔法。
主に緑炎陣を使った時に同時に同時に使う。

・居合、紫炎の太刀

居合の構えから横薙ぎで切り裂く攻撃。
主にガジェットに囲まれた時などに使う。

・黒炎一閃

紫電一閃と同じ。

炎をまとった一撃で攻撃する。

近距離であれば使用回数が多い。

・呪層・怨天祝奉・炎天斬

友紀の最強の一撃。

自分が使える全ての炎をまとわせて斬りこむ。
斬撃として飛ばすことも可能。

アロー時

・フレイムファルケン

炎で作った矢を撃ちだす。

焼き尽くし、貫く力は並の防御では防ぎきれない。

・メテオファルケン

投炎して作った剣を矢の形に変えて撃ち出す。

上空から落下させるように撃つことにより

威力を上昇させる事が出来る。

隕石のような勢いと破壊力で相手を焼き尽くし、砕く。

リリィの魔法

- ・インビジブル・エア

剣を不可視にする魔法。

切れ味を常に最高の状態にしてくれている。

これを解いた場合、切れ味は最高の状態のままとされる。

- ・ウイング・エア

相手を上空へ切り上げた後に斬り抜く技。

斬り抜かずストイク・エアにつながることもできる。

シュベルト時

- ・ストライク・エア

まとわせている風を竜巻にして放つ魔法。

まともに当たれば相手が吹き飛び、切り刻まれる。

アヴァロン時

- ・エクスカリバー

鞘にBBをしまった状態からの抜刀術。

カートリッジロードをして斬撃光波を放つ魔法。

光波を出さずそのまま斬りつけることも可能。

- ・ガード・オブ・アヴァロン

鞘にBBをおさめた状態で相手の攻撃を防ぐことで発動。
相手の視界を光で塞ぎ近距離からエクスカリバーを当てる技。
魔力を根こそぎ持つて行かれるので最終手段として使っている。

ガウエインの魔法

- ・フリーズシュート

氷の弾丸を撃つ魔法。
メインで使う攻撃魔法だ。

ツイングリップ時（2丁銃）

- ・アインオフソウル・バースト

零距离で相手に連射する攻撃。
ガード出来ない距離なためたいていの相手は気絶する。

- ・アインオフソウル・レイン

上空に大量に弾を撃ちだし待機させ、雨のように落とす銃撃。
不意打ちなのでそう何度もきくかわからない。
一度で最大50発撃つ事が出来る。

ライフル時

- ・アインオフソウル・シューティング

遠距離からの狙撃魔法。

なのはよりも正確に当てられる。
また中距離からの射撃魔法としても使える。

- ・アインオフソウル・ブレイカー

零距离で相手に砲撃を当てる技。

A・S時のアインスじゃなければ誰だって気絶する。

ランスロットの魔法

- ・月下一闪

全部のフォームで使える魔法。

紫電一闪と同じで魔力をまとわせて斬りつける。

- ・ガードブレイク

全部のフォームで使える魔法。

防御を崩しながら攻撃する。

- ・ゴット・オブ・フォース

全武器で攻撃する技。

剣、鎌、剣斧で切り刻み槍を投げつけて息の根を止める。

攻撃の際、武器に常に魔力をまとわせているため威力が半端ない。

- ・他武装局員が使える魔法（全員）

第01話 地球へ(前書き)

どうも、s t r i k e r s編第01話はサウンドステージから開始です。

本編の最初の方は結構出来てる方なのでたくさん更新できるかと思っています。

中学編は未だ未定で、いつ更新できるかわかりませんが応援よろしくお願いします。

では、第01話どうぞ

第01話 地球へ

「しかし、この『炎騎士』ってのも有名になったな」

テレビに映る炎騎士の姿を見ながらヴィータは呟いた。

「4年前突然現れ、ロストログア関連の事件に関わり、結果としてたくさんの市民を救っている。そしてロストログアは持ちさる。管理局にとっては一種のロストログアハンターも同然だな」

「それにしてもこの黒服のヤツと炎騎士がリインフォースと友紀に似てんだよな。いつ見てもホントそっくりだ」

炎騎士、そしてその仲間の1人の黒服の女性。

その姿は以前共に暮らしていた家族のリインフォースと友紀に似ているようにヴィータはみえたのであった。

「まー、友紀は可能性があるとしても、リインフォースはありえへんな。みんなの目の前で消えてしもたのはヴィータもしっとるやろ？」

「だけど」

「ウチもちよっとは気になっとなるけど、どうにかできるってわけでもないんや。そんなことより、今回の任務のことなんやけどな」

淡々と事務作業をこなすはやて。

内心、自分だって気にはなっている。

5年前に喧嘩をしていなくなってしまった友紀と、10年前に消え

てしまった八神家の長女リインフォース。

他人のそら似と言うものがあると思うがもし生きているなら会いたい。

そして友紀に謝りたいと思っている。

それに新しい家族のリインに会わせてあげたいとも思っていた。

この時、はやてやヴィータ、シグナムは思っても居なかった。

この後の出張任務先であんな再開が待っているなどとは。

side out

「ホント、何処に食べたものが行くかわからんな」

「胃袋です！もぐもぐ。それにこれから地球の海鳴と言うところに行くのでしょうか？何かあるのかわかりません！腹ごしらえはしておいて損は——んぐ——無いでしょう」

「食べながら喋るなよりリイ。せめて飲み込んでからにしろ」

首都クラナガン。

そこのある飲食店に炎騎士——ユキ達がいた。

無論、食べ放題と言うのをリイが見つけたからここに入った。

「リイ、それ以上食べると太るぞ？」

ピタッ

ランスロットの言葉にリイは手を止めた。

「ま、太ってもかまわないんなら好きにすればいいけどな」

「うう・・・」

「そうだな。食いすぎはいけないな。ま、今日はこんくらいって事でいいんじゃない？」

「わ、わかりました。マスターがそう言うのであれば」

「よろしい。タマモも油揚げばかり食べるのはダメだぞ？」

コクツコクツ

と動物の状態で頷くタマモ。

現在は油揚げ5枚目を食べている。

「それで、いつ頃出発するおつもりですか？」

「んー、そうだな。そういえばアインスは実質里帰りになるんだけっか？」

「はい。ですが、前の主はたぶんこっちに居るので会う事はないかと」

「そうか。ま、そのうち会えるといいな」

「はい」

「とりあえず食ったら行くぞ。日帰りで一日サーチャー置いて調べる」

side out

場所はミッドから変わって地球「海鳴市」
機動六課のメンバーはある場所へ来ていた。

「はい、到着です♪」

「「わぁ・・・」」

「「ここが・・・」」

「なのはさんたちの故郷・・・」

「そうだよ」

「ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

なのはが言うように、地球に来たことが無いFWメンバーから見た地球はほとんどミッドと変わりがなかった。

「空は青いし、太陽も一つだし。」

「山と水と。自然のにおいもそっくりです！」

全員が各々の感想を言う。

エリオに至ってはさすがに感想を言える状況ではなかった。

「と言うか、ここは具体的にはどこでしょう？なんか、湖畔のコテ

ージって感じですが」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使用を、快く許諾して頂けたですよ」

「現地の方・・・ですか？」

全員が「へー」と言った顔をしている。

魔法文化のないこの地球で魔法を知っていて、なお且つそれを快く許諾してくれる人なんてめったにいないからである。

だがこのような別荘を持っていると言う事は相当の金持ちと言える。そんな金持ち、海鳴にはそういるはずもなく限られてくる。

そんな中、何処からかエンジンの音が聞こえてくる。

向こう側からそのエンジンの音を出していたと思われる車が一台やってくる。

「なのは！フェイト！」

「アリサちゃん」

「アリサ」

車の中から出てきたのは金髪の女性。

この別荘の持ち主であるなのは達の幼なじみ。

アリサ・バニングスであった。

「なによもー。ご無沙汰だったじゃない？」

「にやはは、ゴメンゴメン」

「いろいろ忙しくって」

「アタシだって忙しいわよ？大学生なんだから」

「アリサさくん。こんにちわです！」

「リイン！久しぶり！」

「はいですう」

忘れていたかのようにアリサの紹介をするフェイト。
久しぶりに会って意気投合してしまっていたようだ。

「あ、紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

「アリサ・バニングスです。よろしくね」

「」「よろしくお願いします」「」

「そういえばはやては？」

「別行動です。違う転送ポートから来るそうなので」

「たぶん、すずかの所に」

「あ！そう言えば来る途中にめちやくちゃ友紀に似てるヤツがいたのよ！車の中からだったから声はかけられなかったけど、ホント、本人なんじゃないかってぐらい似てたわ！」

「ホント！？それじゃ後ではやてに伝えとくね」

side out

「次元転送完了っ」と

現在俺らは次元転送をおこない地球の海鳴市にやってきた。
まわりを見渡せばミッドとほとんど変わらず、空は青く、太陽は一つ。

山と水、自然も全てと言っているほど変わりがなかった。

「こっちにもやっぱり車とかはあるんだな。さ、ここからは別行動だ。俺とタマモ、アインスで東側を。リリイとガウエイン、ランスロットの3人で西側を頼む」

「よっしゃ、任せて下さいな」

「サーチャー設置だけです。気を抜かぬようお気をつけください」

「リリイは途中で何か買って食べるの禁止な」

「ええ！？」

「お金の管理はガウエインに頼むよ。それと一応羽休めを兼ねてるから楽しみながら行こう」

「わかりました」

「よし、アインス。行くぞ」

「はい、マスター友紀」

「だからマスターかユキのどっちかにしろっていつも言ってるだろ」

「す、すみませんつい」

サーチャー設置は俺の『かげろうえん陽炎影』とリリーの『インビジブル・エア』、フオーサムワンスランスロットの『グロウリー己が栄光の為でなく』で不可視にして行う。

アインスとガウエイン、タマモはその補助を行う。

ロストロギアが近くに来れば反応してデバイスに場所を教えてくれるという仕組みだ。

ちなみにタマモは俺の肩に乗っている。

と言いかいつも俺の肩か頭に乗っている。

そこがタマモの特等席になってるらしい。

この海鳴の光景を見て俺は何か思い出せそうだった。

俺の記憶の断片が何処からか出て来て自分の記憶を思い出せるような気がしてならなかった。

第02話 アインスとの出会い

機動六課、友紀達が地球に来てからだいぶ時間だった。あたりはもう日が落ち暗くなっている。夜になったのがまるわかりだ。

現在機動六課メンバーは夕食を終えてスーパー銭湯に来ていた。

「みんな先に入っててええよ」

はやてがそう全員に声をかけた時だった。横にいつの間にか少年が立っていた。

「大人5人に子供1人ですね。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

その少年の横顔は見た事がある顔だった。声も聞き覚えがある。

後ろ姿も見た事があった。

そう、数年前いなくなった友紀に似ていたのだ。

「あ、主はやて・・・!？」

「リ、リインフォース・・・!？」

後ろから声をかけられたはやて。振り向けば10年前に消えたリインフォースがいた。

「あ、ここではあれなので中で」

「う、うん」

2人で中に入った。

何でシグナム達にも驚かれた。

さらにはリリィ達がヴォルケンリッターと知り合いでアインス自身も驚いた。

「で、どうしてリインフォースが？」

「いろいろありまして。今のマスターのおかげと言うかなんというか」

side out

アインスと友紀の出会いとは4年前。

まだ友紀がまだ炎騎士と名乗ってはいなかったころ。

あるロストログアを誤って発動させた時だ。

『闇ノ断章』

この魔導書は『闇の書』の写本のようなものだった。

蒐集や防御プログラムこそないものの、強力な力を持っている魔導書だった。

なのはとフェイト。

2人に破壊されたアインス。

そのリンカーコアの破片が『闇ノ断章』へ流れ着き、『闇ノ断章』

の管理人格として再生した。

「せめてあなただけでも助けたいので」

「それしか方法が無いんだな？」

「はい。私は無理でもあなただけは」

「そうか。じゃ、俺はお前も助ける」

「え!？」

アインスは驚いた。

友紀1人しか助からないのに自分まで助けようとするなんてと。

「とりあえずこの魔力の塊を切り離さなきゃな。契約するぞ。俺の名前は”ユキ”だ」

「私は・・・」

「リインフォース」と言おうとした時だった。

この名前は自分の二代目に授けたはずだ。

なのにこの名前は名乗れないとアインスは思ったのだ。

「名前が無いのか。だったら俺が付けてやるよ」

少し考えながら「うゝん」と悩む友紀。

そして思いついたのか「よし」と言いながら名前を言った。

「お前の名前は『リインフォース』。祝福の風、幸福のエール『リ

インフォース』だ」

それを聞いた時、アインスは涙した。
はやてと同じことを言ったからだ。
それが嬉しくてたまらなかった。

「え！？え！？い、嫌だった！？」

「いえ、そうではなく。ただ昔の主と同じことを言われて」

「名前がか？」

「はい。それと、私は一代目なので名前の後ろに『アインス』と付けてもらってもよろしいですか？」

「一代目ってことは二代目もいるってことか」

「ですので、お願いします」

「わかった。これからお前の名前は『リインフォース・アインス』だ」

「確認完了。マスター友紀。これで管理者権限が使えます」

「よし、とりあえずいろいろと邪魔なものは切り離させてもらうぜ。
全員！『闇ノ断章』へ向かって一斉攻撃しろ！！そうすりゃ俺らは
出れるから！！」

『了解！』

少ししてから衝撃が走る。
衝撃が収まったと思ったら周りが白く光って、気が付いたら外に出
ていた。

side out

「と言う事があったのです」

「そうなんか。大変やったんやな」

アインスは友紀との出会いを話し、さらに今までの事もいろいろ話
した。

思いう話やみんな楽しくやったこと。
いろいろ話した。

「そう言えばマスターって『友紀』って名前らしいな」

「はい。外見が女の子のようで、一瞬間違えそうになりましたよ」

外見が女の子のよう。

その単語を聞いてはやはり友紀の姿を思い浮かべた。
そして確認のため聞いてみた。

「まさかそのマスターって、クリーム色の髪にセミロングで、碧色
の眼で、身長が低めで、英語がめっちゃ得意で、まさしく元氣っ子
って感じの子か!？」

「え、ええ。よくご存じで」

テレビで見る炎騎士。

眼の色などはわからず身長も良く判らなかつた。
だがアインスの言葉で確信した。

炎騎士は友紀だと・・・。

第02話 アインスとの出会い（後書き）

次回！

ついに友紀とはやては再会を果たす！

だが友紀ははやてのことを覚えていたのだろうか！
そしてはやてと友紀は仲直りできるのか！？

それは次回のお楽しみ。

感想お待ちしております。

第03話 悲しき再開

全員がお風呂から上がった後。

炎卓騎士一同十機動六課メンバーは話しこんでいた。

「まさか夜天の主と出逢うとは」

「ヴォルケンズとも会えたしな」

「そう言えばマスターは？」

あたり見渡しても友紀の姿が見えない。

炎卓騎士は誰も何処に行ったかを知らない。

そんな時だった。

あたりの空気が一瞬で変わる。

結界を張られたのだ。

「これって封鎖領域!？」

「これが使えるのって・・・」

「マスターしかいませんね」

「それにサーチャーにも反応がある。たぶん先行ってんじゃね？」

その時これを使ったのが友紀であることを知ったはやては1人走り出した。

シャルやヴィータの制止も振り切って。

side out

何かを感じ取った。
それしか言えない。

風呂に入ってゆっくりしていると何かを感じ取った。
たまにあるんだ。
たぶん、ロストロギアがある。

ランスロットとガウエインには何も言わず銭湯を抜け出した。
何処かわからないけど河原のあたり。
確かここにもサーチャーを仕掛けたはずだ。

ポヨヨーン、ポヨオーン、ボヨヨオーン。

そこには無数の——スライム？
これ、本当にロストロギアか？

「めんどいから一発で決めるぞ^{ステオ}M」

『ヤヴォール！』

「居合——」

Mを居合の構えにする。
魔力を溜めて一撃にかける。

「——紫炎の太刀！！」

紫色の炎はスライムを全て飲み込んだ。

そして一体だけ残っている。

どうやらこれが本体のようだ。

「なんだこれ。今回は外れ引いたみたいだな」

「あ、あの！」

後ろから声をかけられる。

封鎖領域内なのに動けるってことは魔導師だろうか。

「何か用ですか？」

「え、あ、えっと・・・」

ストレートの髪型をした女性。

俺に用事って事はたぶんこのロストログアだろう。

「まさかこれ？」

「は、はい。それを渡して下さい」

「どうして？」

「管理局員です。なのでそれを――」

「イヤだね。渡してほしけりゃ力づくで奪ってみなよ。管理局さん」

なんだ、こいつ。

俺の頭の中に入ってこようとしている。

俺は、こいつを——知っている？

でも俺のなんなんだこいつは。

「あんまり戦いとかはしたくないんやけど」

「そ。でも戦わないと、これ、俺が持って帰っちゃうよ?」

「で、でも・・・」

戸惑っている。

なんで?

俺とあんたは見ず知らずの他人だぞ?

普通に戦って奪えばいいじゃねえか。

なんでそんなことをしないんだよ。

「はやて!」

後ろから数人走ってくる。

あれはたしか、ヴォルケンリッターだっけか?

夜天の書の守護騎士。

と言う事はあいつは夜天の主?

はっ。だったら話は変わるな。

「お前、夜天の主だったのか」

「一応な」

「だったら話は変わる。俺はあんたをぶったおして夜天の書を頂こう。それも立派なロストログアだからな」

「な!？」

「逆に俺がぶったおされりゃこれやるよ。投炎・開始!」
フレイム オン

両手に干将・猊耶を作り出す。
こっからはマジで行くぜ。

走ってあいつに迫る。

だがそれは無理だった。

1人の騎士に止められた。

「やめろ。こちらに戦闘の意志はない」

「そっちになくてもこっちにはある!」

はじき返して一旦距離を取る。

あちらは以前剣を構えたままだ。

「それともあんたも戦いたくないって言うのか?」

「ああ」

あいつら全員を見ているとなんだか嫌だった。

3人とも俺の頭の中に入ってくる。

それが嫌で嫌でしょうがなかった。

特に最初に話しかけてきたやつ。

「・・・業火緑炎陣」

「な!?!消えた!?!」

「俺はあんたが一番気に入らない・・・」

「っ!?!」

前に出てる2人を無視して後ろい似るあいつを狙った。
痛みが来ると、目を瞑っている。

その時、何かが頭の中を駆け巡った。

(友紀!)

「!?!」

時はすでに遅かった。

俺はもう剣を突き出していたから。

(友紀!!!)

「やめてください友紀!!」

「!?!くそっ!?!」

アインスが止めるために声をかけてくれた。

俺は無理やり軌道をずらした。

顔めがけて迫っていた剣はギリギリで頬をかすめる。
かすめた場所からは血が流れ出していた。

「・・・え?」

俺は何故か泣いていた。
何でかわからない。
ただ涙が出ていた。
何が悲しいのかわからない。
ただ涙が止まらなかった。

「M、出せ」

『いいんですかい？』

「いいから出せ！！」

『りょーかい』

封印を済ませたロストログアを出した。
それを”姉ちゃん”の前に差し出した。

「え？」

「手、出せ」

涙を流したまま言った。

差し出された手の上にロストログアを置く。

「あ、ありが——」

「行くぞアインス！！」

「は、はい。すみません、主はやて」

「う、うん」

その後無言のままその場から立ち去った。
ただ、思い出したくなかった記憶と共に。

第03話 悲しき再開（後書き）

ついに友紀とはやては再会を果たす。

だが友紀ははやての事を覚えていない。

戦いの中思い出す自分の過去。

2人はいったいどうなるのか。

次回！

リリィ達が友紀の過去を話す！

そして納得したはやて達！

そしていつか必ず仲直りをする決めたはやて！

友紀はそれに応えてくれるのだろうか！？

第04話 過去と間違い

「なあ、アインス。俺は間違っていたのか？」

リリィ達を残してアインスと2人で河原でたたずむ。
静かに、そして確かめように聞いた。

「俺は今まで自分の記憶のためだけにロストログアを追っていた。
邪魔するやつは全員叩き潰してきた。たとえ相手がだれであっても、
相手に敵意が無くても叩き潰して奪ってきた。だけどそれは間違い
なのか、俺にはわからなくなってきた」

「・・・」

「記憶を取り戻して初めてわかったよ。俺が、俺たちがやってた事
はただの犯罪者たちとなんら変わらない。ただたくさんの人を救っ
ただけだったんだ」

アインスはどう返せば友紀のためになるか考えていた。
だが、答えは見つからなかった。

「俺は実の姉を殺そうとした。そこまでして俺は記憶がほしかった
んじゃない。ただ、氣にくわなかったただけだ。喧嘩して、家出して、
それでどんな顔して会えばいいかわかんなかったから。だからあんな
八当たりみたいなことしちゃったんだ」

「友紀・・・」

「なあ、教えてくれアインス。俺はどうしたらいい。どうすれば姉

ちゃんと、家族のみんなと仲直りできるんだ!？」

泣きながら問いかけてくる友紀。

それに対してアインスは優しい眼差しで友紀を見つめながらこう答えた。

「・・・簡単です。ただ「ごめんなさい」と素直に謝ってしまえばいいんです。何も特別な事はしなくていいんで。ただ素直に謝れば」

そう言いながら優しく友紀を抱きしめた。

まるで母親のように、子をなだめるように。

「うん・・・」

ただ泣きながら、そう答えるしかなかった。それしか答えは見つかってなかったから。

side out

友紀たちが去った後。

はやてとシグナム、ヴィータの3人は別荘へ戻ってきていた。

「はやてちゃん、どうしたのその傷!？」

戻ってくるやいなやシャルがやってきた。たぶん、心配していたんだろう。

「ああ、えっと・・・」

「戦闘があつてな。相手は・・・炎騎士だった」

「ええ！？まさかこっちに來てるんですか！？」

「でも大丈夫や。ほら、これ」

封印の完了したロストログアを出す。

一応これで今回の目的は完了した。

（アインス。私達はマスターの過去を話してもいいのか？）

（ああ。事情を話せば主はやてたちは納得してくれるはずだ）

（わかった。マスターに恨まれないように祈るしかないな）

アインスとの念話を終えて向き直ったリリィ達炎卓騎士。

そしてはやて達へ声をかけた。

「夜天の主よ。マスターの事なんだが」

「へ？ああ、ええよ。気にせんでも」

「いえ、そういうことではなく。マスターの過去についてです」

「過去？友紀に何かあったんか？」

「はい」

はやての怪我の手当で、と言ってもばんそうこうを張るだけなのだ

がそれを終えてから全員で話す事になった。

「マスターは私達と会う前の記憶が無いのです」

「!？」

リリイの言葉に驚愕した八神家。

無理もない事だろう。

「こっちに来た時の衝撃で守護騎士システムが誘発され私達が現れたのですがマスターは何も覚えていなかったのです。自分の事、自分の過去、自分に関わること全部覚えていなかったのです」

「ただ唯一覚えていた言葉がありました」

「そ、それは？」

「『思いだしたらロストロギアを追い続けろ』この言葉に何か心当たりは？」

聞いてみるが全員は知らない。

まず友紀がそういう関連にあった事はめったにないのだから。

「その言葉だけを頼りにマスターは自分探しの旅に出ました。もしかしたらそいつが自分を知ってるかもしれない、自分が誰だか教えてくれるかもしれない。その希望を持って」

「ロストロギアを追うようになったのはそのせいですかね。おかげで何度も死にかけてますぜ、友紀は」

友紀は自分が誰だか分らなかった。だから探し続けた。

自分の記憶のため、それ以外の理由なんていらなかった。

でも何度も死にかけた。

自分の体を第一には考えず、記憶と家族を優先させていた。

身も心もボロボロでいつ倒れてもおかしくない状況下で今回のような事が起きた。

アインスからの念話で事情は聞いていた。

実の姉を殺しかけて、泣きながらロストログアを渡したと。

「友紀が泣いていた理由はあんたが一番よく判ってるんじゃないかい？ 夜天の主さん。他にもヴォルケンリッターの全員もな」

ランスロットに言われ俯く八神家。

その理由を、原因を知っている。

原因を作った張本人とも言ってもいい。

「ウチらは酷い家族や。相談もせず友紀を置いていこうなんて考えたからあかんかったんや」

「前から魔力反応が家の中で出ているのがわかっていたが行くと消える。その正体が友紀とわかっていればあんなことには・・・」

「事実は伝えました。後はあなたたちがどうするかです」

「ウチらは・・・友紀と仲直りしたい。そしてちゃんと謝りたいんや」

「なら次に会ったときにでも。（全員、ミッドに戻るぞー！）おや、お早い立ち直りで。では私達はこれで」

そう言い残してリリィ達も去って行った。
はやて達は必ず仲直りをしたいと胸に決めたのであった。

第05話 ホテルアグスタ

現在、友紀たちはホテルアグスタ付近に待機中。

今回は骨董品などが出展されるオークションがある。

そこにはロストログアもあるかもしれない。

そう踏んだ友紀はウェイバー達が来るのを待つために張り込んでいたのであった。

「よし、とりあえず中はガウエインとリリィが頼む。俺らは外で待つ」

「わかりました。一つ質問なんですがその箱は？」

「これ？ えっとロストログア数種」

「何で!？」

「え、いや、いろいろあったから」

「いろいろってなんですか!？」

ランスロットに突っ込まれた。

何で持ってきてるかは秘密だ。

「とりあえず警護にあたってくれ。何かあったら連絡すること。いいな?」

「はい」

「何で持ってきたのが気になりますが、わかりました」

「教えてくれ！頼む！」

「それは秘密だ！！」

こんな光景を見ていてアインスは1人は笑っていた。
友紀がロストログアを持ってきた理由を唯一知っているためだ。

side out

『でも今日は、八神部隊長の守護騎士団全員集合かあ』

『そうね。・・・そういえば、あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか、副隊長達のこと』

『うーん。父さんやギン姉から聞いたことくらいだけどね』

スバルが暇潰しにティアナに念話をしてきていた。

それにつき合っているとはやて達の話になった。

はやての事を知らないティアナは聞く事に。

はやての使うデバイスは魔導書型、名前は「夜天の書」

ヴィータとシグナム、その2人にシャル、ザフィーラ、リインの5人ははやてが所有する特別固有戦力で、全員がそろえば無敵の部隊になるらしい。

『あと、前に来てた人達が部隊長の弟さんの守護騎士らしいよ』

『らしい?』

『うん。何でも弟さんも魔導書とレアスキル持ちらしいとか。まあ、隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘次項だから、アタシも詳しくは知らないけど』

『レアスキル持ちの人はみんなそうよね』

『?ティア、何か気になることあるの?』

『・・・別に、何もないわよ』

『そう、じゃあまた後でね』

そう言って念話を終えた2人。

だがティアナの心の奥底に、拭いきれない疑問が残る。

通常ではありえないくらいの戦力を保有している機動六課。

はやてがどういう裏技を使ったか隊長は全員オーバーS。

副隊長でもニアSランク。

他の隊員達だって、前線から管制官まで、全員未来のエリート達だ。

フェイトの秘蔵っ子でもうBランクを取っているエリオ。

レアな竜召喚士のキャロ。

潜在能力と可能性のかたまりで、優しい家族のバックアップもあるスバル。

もはや普通の隊ではないだろう。

隠そうとしても隠す事の出来ない事実だ。

「やっばい凡人はアタシだけか・・・」

side out

木の上で待機。

一応サーチャーを仕掛けてガジェットなどの反応を待つ。

（マスター！ガジェットの反応ありました！）

「よし、迎撃行くか。オークション邪魔されてウェイバー達が来なくなったら来た意味ないからな。（ランスロット、アインス、反応あったな？）」

（ありました。迎撃に当たりますぜ）

「（頼む）タマモ、ユニゾン行くぞ」

（りょーかいです！いきますよ！！）

「（ユニゾン・イン！！）」

バリアジャケットに身を包み空へと足を踏み出す。

一瞬で炎が空中に現れ足場となり進めるようになる。

「フレイムロード！」

空を駆け抜ける。

そしてガジェットへ突っ込み懷で投炎をして切り裂く。

「フレイム
フラクタル投炎・重装・・・!!」

隕鉄の轡。

もう1つのMの形をした剣を作り出し切り裂いた。

（あ、動き変わりましたね）

「自動操縦から有人操縦に切り替わったか。だが――」

動きが変わっている状態で近づいて一撃。
ガジェットはばらばらになり爆発を起こす。

「こんな程度じゃ変わっても意味ないだろ」

（ですね）

「動き変わった程度でうろたえる人じゃないでしょ。ねえ、”シグ姉”、”ヴィー姉”」

「な!？」

「お前・・・」

「話は後。とりあえず今回は目的は一緒みたいだから手伝うよ」

「・・・わかった。協力感謝する」

「シグナム!」

「もめてる場合じゃないと思うよ。あっちの方、召喚師がきたら押されちゃうんだけど」

「そうだな。ヴィータと友紀は新人たちの方に行ってやれ」

「了解。フレイムロード!!」

そう言って先に行ってしまった友紀。
その後追いかけるヴィータであった。

side out

「っ!?! 遠隔召喚、来ます!」

キャロが叫んだ。

どうやらガジェットが来るようだ。

「あれって、召喚魔方陣!?!」

「召喚でこんなこともできるの!?!」

「・・・優れた召喚士は、転送のエキスパートでもあるんです」

「何でもいいわ、迎撃いくわよ!」

「」「おうっ!」「」

ガジェットへ向けて魔力弾を撃つ。

訓練のダミーなんかとか比喩物にならない動きをするガジェットに、
全て難なく回避されてしまう。

当たってもAMFのせいで、てんで手ごたえが無い。

「ティアさん!!」

キャロの声のおかげで攻撃を回避することが出来た。

集中しろ。

このままじゃジリ貧だ。

そう思い集中するティアナ。

『防衛ライン、もう少し持ち堪えて! ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから!』

「守ってばっかじゃ行き詰まりますっ! ちゃんと、全機落とします
!」

「でも大丈夫? 無茶しないで」

「大丈夫です。あんなに毎朝毎晩練習してきてるんですから。エリオ、センターに下がって! 私とスバルのツートップで行く!!」

「あ、はいっ!」

「スバル? クロスシフトA、行くわよ!」

『おうっ!!』

スバルがウィングロードでガジェットを引き付けていく。
それを確認して、ティアナはクロスミラージュのカートリッジをロードした。

数は、4発。

（証明するんだ・・・特別な才能や、凄い魔力が無くたって・・・）
ティアナの周りに無数の魔力弾が浮かび、そこに魔力が上乘せされていく。

（一流の隊長達がいる部隊でだって・・・どんな危険な戦いだって・・・！）

目を見開いて、ガジェット達に狙いを定める。
そしてもっと魔力を上乘せさせて行く。

「アタシは、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を打ち抜けるんだって！！」

クロスミラージュを構えて、引き金に指をかける。
さらに狙いを定める。

『ティアナ！？4発ロードなんて無茶だよっ！それじゃティアナもクロスミラージュも・・・！』

魔力が目に見える程に膨れ上がって、ティアナの腕に電流のように絡みつく。

だがそんなの気にしてはいなかった。

「撃てます！」

『イエス！』

「クロスファイアー！」

両手を掲げて、引き金を――

「シュート！！」

引く！！

side out

ティアナがたくさんの魔力弾を撃った。

そのほとんどがガジェットに当たっていく
でもそのうちの一発がそれた。

その魔力弾はスバルめがけて一直線に飛んでいく。

当たる！

そう思ってスバルは眼をつぶった。

だが一向に痛みが襲ってこない。

どうしてだろうと眼を開けるとそこには紅い服を着た少年がたっていた。

その少年は片手をかざし、その先には7色の炎が現れていた。

「たく、熾烈極めし七つの炎使うなんて。大丈夫か？」

「え、あ、はい」

「次は気をつけろよ。それと、そのツインテール！お前、仲間撃つなんて正気か！？」

その少年はティアナを怒鳴って叱っていた。

第06話 仲直り

「お前、仲間撃つなんて正気か!？」

怒鳴っていた。

見ず知らずのスバルを助け、その上ティアナを叱っていた。

何故そこまでするのだろう。

そう思っていたスバル。

「あの、今のもコンビネーションのうちで——」

「バカかお前は! 直撃コースに入ってコンビネーションの内だと! ? それだったらお前らはどれほどのクズなんだよ! そんなコンビネーションやるんだったら最初からやるな!」

「でも、今のはアタシが失敗して——」

「いいか、これはお前の失敗じゃない、あいつの失敗だ。バカを飛ばうのも大概にしろよ」

そんな中ヴィータがやってくる。

そして話に割り込んできた。

「何があったんだよ」

「このバカとツインテールを下がらせて。居たって戦闘の邪魔になる」

「・・・。わかった。ティアナとスバルは下がれ。あとはアタシ達で片付ける」

状況を見て察したのかスバルとティアナを下がらせたヴィータ。その後全てのガジェットを殲滅しシグナムへ連絡を入れる。

「こっちは終わった」

『こちらもだ。召喚士は、追いきれなかったがな』

『だが、居ると分かれば対策も練れる』

「・・・だな。スバルとティアナは？」

「ティアさんなら、裏手の警備の方に」

「スバルさんも一緒です」

「あれ、あいつは・・・」

こちら側。

つまりヴィータ達の方に友紀の姿はない。

「シグナム、そっちにあいつ来てねえか？」

『いや、こちらには来ていない』

「じゃあ、何処行っただ・・・？心当たりあるか？」

『たぶん主はやてのところだろう』

「また奪いに来たのか!？」

『バカかお前は。気付いてなかったのか? 友紀が私達をなんて呼んでいたか』

「・・・あ」

『そう、あいつは私達の事を”シグ姉”、”ヴィー姉”と呼んでいた。つまり』

「記憶が戻ってる・・・」

side out

(リリイとガウエインは外に行ってくれ。たぶんもう襲ってくる事はないと思うけど念のために)

(わかりました。中はどうするおつもりで?)

(俺が行く)

(承知しました)

さて、交代は完了した。

あとは姉ちゃんを探すだけだ。

「えーっと、どこに……。あ、いた」

見つけたのはいい。
だがどう会えばいいんだろう。

つい先日地球で出逢ってこっちから仕掛けた。
怪我をさせた上に変な別れ方までした。

こんな状態でどう会えばいいんだろう。

「これ、どう渡そうかな・・・」

ただ仲直りしたかった。

レリックを集めてるのを知って持ってきた。

「しゃーなし。なるようになれ」

「何ができるようになるんや？」

「おわっ！いつの間に！」

気合いを入れて会いに行こうとした時だった。
逆に見つかってしまった。

「え、あ、えっと・・・」

「その箱は？」

「え？あ、そうだ、これ！」

持ってい箱（ロストログアレリック入り）を前に出す。

姉ちゃんは何のことかわからないようだ。
あたりまえだけど。

「へ?」

「ま、前のお詫び。怪我、させたから・・・」

「・・・。ありがとおな」

その箱を受け取ったはやて。

「それと、なんて言うか・・・。謝りたいんだ」

「何を謝るん? ウチ、何もされておらんよ?」

「ううん、したよ。酷いこと言った。話を聞こうとしなかった。悲
しませた。他にもいろいろやった」

この言葉でもうはやては気がついていた。
友紀には記憶が戻っていると。

「だから謝りたい、仲直りしたい。今日、会いに来たのはそのため」

「・・・そか。それならウチも謝らなあかな」

「そう・・・なんだ。先、謝っていい?」

「ええよ」

「・・・ゴメン姉ちゃん。酷いこと言って、話聞かないで出て行っ

て・・・」

泣きながら謝る友紀。

それに対してはやても泣きながら答える。

「ええよ、もう気にしてないから。それにウチの方こそゴメンな。勝手にこっちの話を進めて、友紀に何の相談もしないで、」置いていこう」なんて決めちゃって」

謝って、謝られて。

泣いて、泣かれて。

そうやって仲直り出来れば一番いい。

「・・・仲直り、できたのかな・・・？」

「そなもん、お互いに謝った時点でもう出来とるやろ」

「そっか。俺、これからどうしよう・・・」

「六課に来たらええねん。歓迎するで」

「うん、お願い」

仲直りが出来た。

今日はそれだけで十分。

俺はもう何にも要らなかった。

第06話 仲直り（後書き）

ついに仲直り完了。

中学編がなかなか更新できない（ネタが無い）

喧嘩の内容もだいたい出来てはいるんだけどそこまで到達しない・・・。

まだまだ時間かかるだろうなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4729q/>

魔法少女リリカルなのは 夜天の弟

2011年10月8日10時40分発行